

上下遺跡・常衛遺跡

—近江八幡市御所内町・西生来町所在—

平成2年3月

滋賀県教育委員会
財団法人滋賀県文化財保護協会

上下遺跡・常衛遺跡

—近江八幡市御所内町・西生来町所在—

平成2年3月

滋賀県教育委員会

財団法人滋賀県文化財保護協会

序

滋賀県教育委員会では、活力のある県民社会、生きがいのある生活を築くための一つとして、個性豊かな文化環境づくりに取り込んでいます。特に文化財保護行政にたずさわるものとして、近年の社会変化に即応し県下の実情や将来あるべき姿を見定めつつ、文化財の保護と活用に努めております。

先人が残してくれた文化財は、現代を生きる我々のみならず子々孫々に至る貴重な宝でもあります。このような大切な文化遺産を破壊することなく、後世に引き継いでいくためには、広く県民の方々の文化財に対する深い御理解と御協力を得なければなりません。

ここに、平成元年度に実施しました県営ほ場整備事業に係る発掘調査の結果を取りまとめましたので、御高覧のうえ今後の埋蔵文化財の御理解に役立てていただければ幸いです。

最後に、発掘調査の円滑な実施に御理解と御協力を頂きました地元の方々、並びに関係機関に対して厚く御礼申し上げます。

平成2年3月

滋賀県教育委員会
教育長 西池季節

例　　言

1. 本書は平成元年度県営ば場整備事業に伴う近江八幡市上下遺跡・常衛遺跡の発掘調査報告書であり、平成元年度に発掘調査し、同元年度に整理したものである。
2. 本調査は県農林部からの依頼により、滋賀県教育委員会を調査主体とし、財団法人滋賀県文化財保護協会を調査機関として実施した。
3. 発掘調査にあたっては、近江八幡市教育委員会・八日市県事務所土地改良第二課の諸機関および地元の協力を得た。
4. 本書で使用した方位は磁針方位に基づき、高さについては東京湾の平均海面を基準としている。
5. 本事業の事務局は次のとおりである。

平成元年度

滋賀県教育委員会

文化財保護課長	伊香 照男
〃 課長補佐	小川 啓雄
埋蔵文化財係長	近藤 滋
〃 主任技師	山路 正幸
管理係主任主事	山出 隆

財団法人滋賀県文化財保護協会

理事長	吉崎 貞一
事務局長	中島 良一
専門員兼企画調査課長	林 博通
調査第一係長	大橋 信弥
調査第一係主任技師	三宅 弘
調査普及課技師	小竹森直子
調査第一係技師	平井 美典
調査第一係技師	北村 圭弘
総務課長	山下 弘

6. 本書は、三宅と小竹森と北村が調査担当部分を分担執筆し、澤田幸・澤田恵・内山悟・堀川明美の協力を得て三宅が編集を行なった。
7. 出土遺物や写真・図版については滋賀県教育委員会で保管している。

本文目次

序

例　　言

第1章 近江八幡市 上下遺跡

1. 位置と環境	1
2. 調査の経過と方法	1
3. 調査結果	2
I. 試掘調査	2
II. 発掘調査	2
4. まとめ	17

第2章 近江八幡市 常衛遺跡

1. 位置と環境	21	2. 調査の経緯	21
3. 調査結果	22		
I. 試掘調査	22		
II. 発掘調査	22		
4. まとめ	26		

挿図目次

I. 上下遺跡

- 第1図 試掘トレンチ配置図
- 第2図 試掘トレンチ土層柱状図
- 第3図 発掘調査トレンチ配置図
- 第4図 出土遺物実測図
- 第5図 出土遺物実測図

II. 常衛遺跡

- 第7図 試掘トレンチ配置図・試掘トレンチ土層柱状図
- 第8図 発掘調査トレンチ配置図
- 第9図 出土遺物実測図

図版目次

I. 上下遺跡

- 図版1 調査前状況／作業状況
- 図版2 T1全景(南から)／T1全景(北から)
- 図版3 T2全景(北から)／T2全景(北から拡大)
- 図版4 T2、SB1検出状況／T4、SD22と断面
- 図版5 T3全景(南から)／T4全景(北から)
- 図版6 T5全景(西から)／T6全景(北から)
- 図版7 T7全景(東から)／T8全景(東から)
- 図版8 T9全景(南から)／T9全景(北から)
- 図版9 T10全景(東から)／T11全景(東から)
- 図版10 T12全景(南から)／T12下層全景(南から)
- 図版11 T13全景(東から)／T13全景(西から)
- 図版12 T13下層全景(東から)／T14全景(南から)
- 図版13 T14全景(北から)／T15全景(西から)
- 図版14 T16全景(北から)／T16全景(南から)
- 図版15 T16上層全景(北から)／T16下層、SD63と断面

- 図版16 T17全景（東から）／T17全景（西から）
図版17 T17下層全景（北から）／T17下層全景（南から）
図版18 出土遺物
図版19 出土遺物
図版20 出土遺物
図版21 出土遺物
図版26 遺跡周辺図
図版27 T1・T2遺構実測図
図版28 T3～6遺構実測図
図版29 T7～9遺構実測図
図版30 T10～13遺構実測図
図版31 T14～17遺構実測図
図版32 T12～17下層遺構実測図

II. 常衛遺跡

- 図版22 調査前状況（南から）／遺構検出状況（A地区・南から）
図版23 A・B地区全景（南から）／A地区全景（北から）
図版24 SAO1（A地区、南西から）／S X O 6（A地区、西から）
図版25 C地区全景（南から）／SAO2（C地区、南東から）
図版33 遺構実測図（A地区）
図版34 遺構実測図（A・B地区）
図版35 遺構実測図（C地区）

第1章

上下遺跡

第1章 近江八幡市 上下遺跡

1. 位置と環境

滋賀県と三重県の県境にある御在所山に源を発した愛知川は北西方向へ流れ、同じく日野川は一度南西へ向った後、日野町・蒲生町を経て再び流路を北西に変える。これらの両河川が形成する扇状地は、県下最大の湖東平野と呼ばれる肥沃な低地となっている。両河川の間には、蛇砂川や白鳥川などの小河川が数多く出来、平野に散在する小高い山々の間をぬって流れている。上下遺跡の周辺は、南を長光寺山、東を箕作山、北を観音寺山に囲まれ、西方は琵琶湖へと広がっている。

周辺の遺跡は、旧石器時代には吉ヶ藪遺跡、縄文時代の遺跡としては安土町弁天島遺跡などがある。

弥生時代には前期に長命寺湖底遺跡・堀上遺跡などがあり、中期には出町遺跡・浅小井遺跡などが見られるが、中期後半から後期が中心となっている。

古墳時代の遺跡としては、出町遺跡・三明遺跡・般学院遺跡・安土町慈恩寺遺跡・小中遺跡などがある。古墳としては安土瓢箪山古墳・雪野山古墳の前期古墳、中期以降には千僧供古墳群・安土町常楽寺山古墳群・蒲生町木村古墳群などが挙げられる。

古代には、金剛寺遺跡・勧学院遺跡・後川遺跡・西中遺跡等、掘立柱建物を中心とした集落跡の検出された遺跡が多い。金剛寺遺跡では、9世紀末～10世紀後半の庄官舎もしくは有力農民の屋敷跡と考えられる規格性をもった掘立柱建物群が検出された。

中世期以降になると、近江国の守護職であった佐々木六角氏の支配下となり、観音寺城を拠点として周辺に佐々木氏や家臣の居館が数多く存在している。これらの近辺にも、瓶割城・安土城などの山城が点在している。上下遺跡の南に位置する久郷（藏ノ町）遺跡は11世紀末から14世紀初頭にかけて5時期にわたって掘立柱建物群が形成され、近江における戦国時代から織豊時代に移行する地方豪族のあり方がわかる遺跡として重要である。

近世になると、上下遺跡や常衛遺跡の付近に中山道が通り、現在の武佐の集落に宿場があったと言われている。

上下遺跡については、昭和63年度の試掘調査で、奈良時代から室町時代にかけての須恵器・土師器・陶磁器類が出土している。（三宅）

2. 調査の経過と方法

上下遺跡の発掘調査は、平成元年ほ場整備事業（近江八幡市武佐地区友定工区）が上下遺跡の範囲内で施行されることになり、事前に発掘調査を行う必要が生じた。それに先立って行われた試掘調査は、昭和63年10月25日～10月28日と昭和63年12月17日に分けて行われ、掘削削平を伴う排水路、削平面を対象として、2m×3mのトレンチを46箇所設定した。その結果、遺構の確認さ

れた山側の排水路部分について発掘調査が行われることになった。排水路部分は、計1.545m²に及んでいる。発掘調査は0.4m³級バックホーを用いて表土を除去し、遺構面直上まで同機械による掘削を行い、その後人力によって遺構の検出・掘削を行った。その後、実測、写真等による記録化を図った。現地調査は平成元年6月26日～8月5日の約1ヶ月半を要し、整理作業は同年度内に実施した。(三宅)

3. 調査結果

I. 試掘調査

基本層序は、耕土約20cm、床土約10cm、灰褐色系土約30cm～60cm、黒褐色土（黒ボク）約10cm～60cmであり、黄茶色系土もしくは疊層が遺構面形成上となっている。調査前の状況では、東半部（G 5～19・41～46およびG 33～40）は西半部より約2m高くなっていたが、遺構面検出標高がG 1～6、G 22～31では99.50m前後、G 14～19・41～46では100.5m前後、G 34～40では100.0m前後であり、顕著な比高差は認められない。

遺構面形成上である黄茶色系土もしくは疊層はほぼ全域において検出され、径約20cm～50cmの円形の柱穴を主として、土壤や溝が確認された。鎌倉時代を中心とする時期の土器類はほぼ全域から出土しており、遺構の大半は当該期のものと想定されるが、G 1～5・18・20・31では奈良時代の須恵器、土師器が、またG 24～26、38、39では室町時代の土師質土器、陶磁器が出土しており、概ね3時期の遺構、遺物によって構成されることが想定される。また、G 24では石垣を有する環状遺構を、G 38、39でもかなり大規模な溝が検出されており、居館に伴う区画溝である可能性が高い。なお、G 7～10、21、32、35では黒褐色土（W層）が厚く堆積しており、調査対象地を東西に2分する南北方向の落ち込みとなっている。(小竹森)

II. 発掘調査

遺構

調査地区内を17箇所のトレーニチに分け、それぞれT 1～T 17としたので、その番号順に詳細を述べてゆく。

T 1

土壤5基、溝10条を検出した。

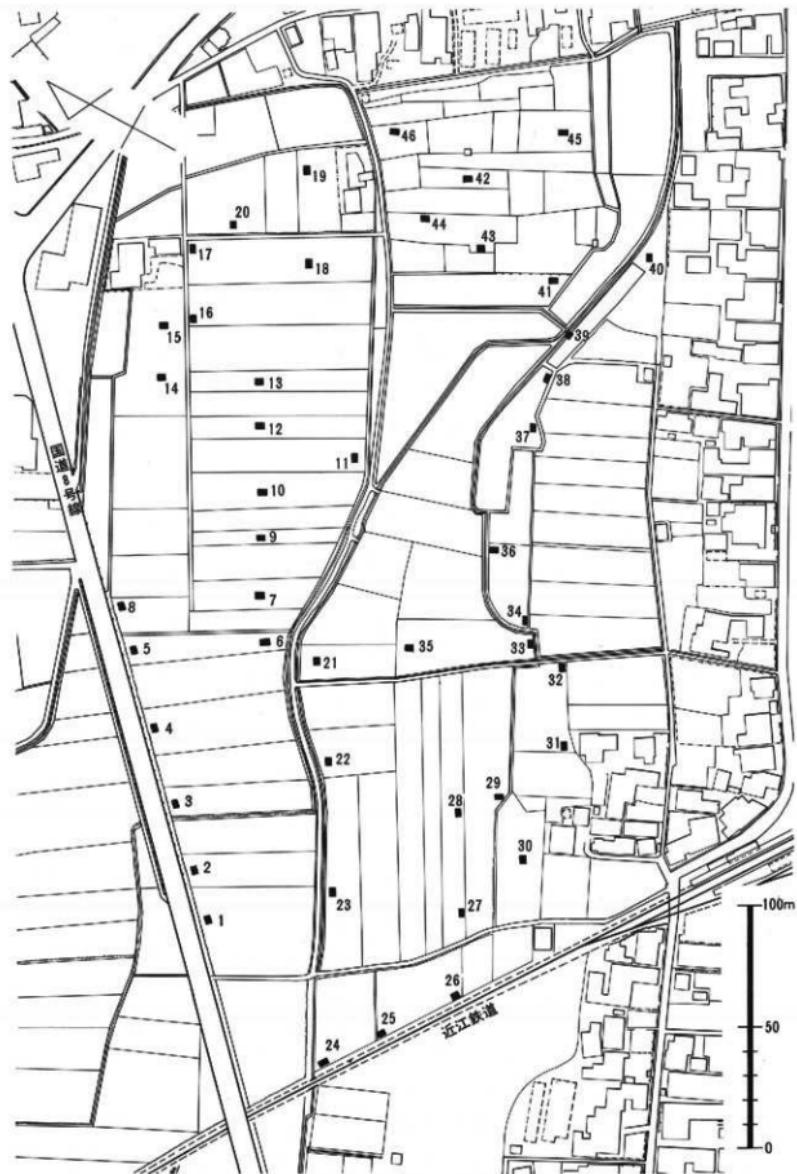
a) 土壙

S K 1 トレーニチ南寄りで検出された。直径70cm～80cmのほぼ円形を呈し、深さは20cmを測る。

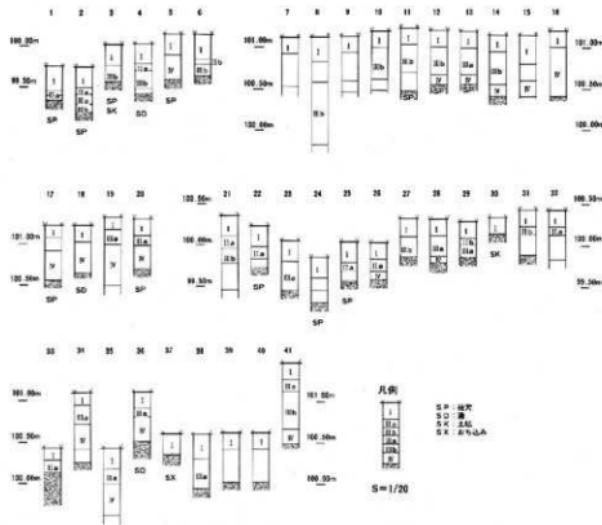
S K 2 トレーニチ中央からやや南に寄って検出された。南端は未調査であるが、縦1.5m以上、横1.2mの楕円形もしくは溝状を呈する。深さは10cmに溝たない。

S K 3 トレーニチほぼ中央に位置する。直径1.2m～1.3mの円形を呈し、深さは65cmを測る。井跡かも知れない。

S K 4 トレーニチ北端に近く検出された。北側が未調査であるが、直径80cm程の円形を呈すると考えられ、現在26cm分が検出された。深さは10cmを測る。



第1図 試掘トレンチ配置図



第2図 試掘トレンチ土層柱状図

SK 5 SK 4 のやや北に位置する。北部は未調査、東部は S D S に切られているため、全容は不明であるが、80cm以上×45cm以上を測り、深さは10cmを測る。中央でさらに30cm程落ち込んでいる。

b)溝

S D 1 トレンチ南端で検出された。北東から南西に向ってまっすぐに流れる形状を呈し、長さ2.2m以上、幅30cm、深さ7cmを測る。

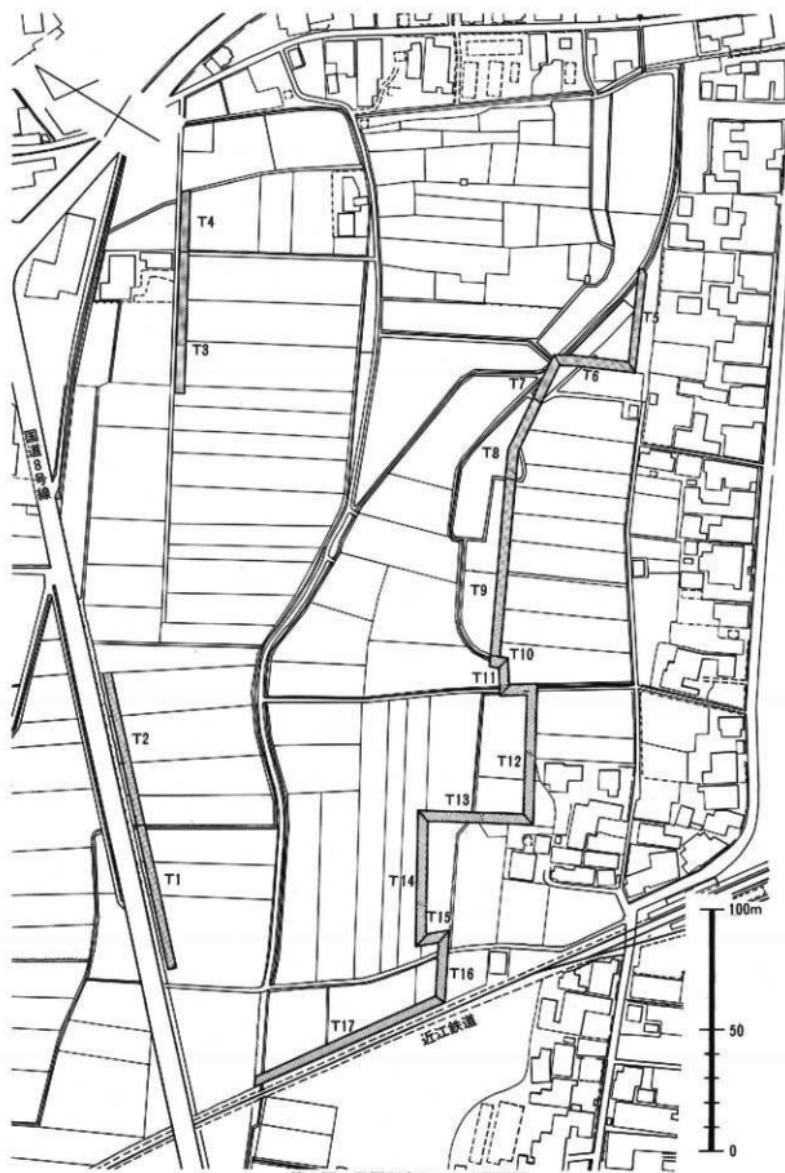
S D 2 S D 1 の東で検出されている。北端をピットに切られているが、長さ1.6m以上、幅80cm、深さ10cmを測る。

S D 3 S D 1 と右岸を重複して同方向に流れる形状を呈する。長さ2m以上、幅約6mを測り埋土に砂砂砾が多いことから旧河道かと考えられる。深さは13cmを測る。

S D 4 トレンチ南辺に平行し、さらにそれから直角に流れるL字状を呈する。長さは平行部分が2.2m、直角に曲った後が2.3m、幅は同じく20cmと90cmを測る。深さは20cm～50cmを測る。

S D 5 SK 2 の東に位置する。SK 2 と同じくほぼ南北を向いて流れる。長さ1.8m、幅1m～1.4mを測る。深さは5～6cmである。

S D 6 SK 3 の東に重複して検出された。西辺はSK 3 に切られているが、トレンチに直交する。東辺はほぼ南北に向って延びている。長さは1.8m以上、幅は1.5m～2.5mを測る。中央が複雑に落ち込み、最大60cmの深さを測る。



第3図 発掘調査トレンチ配置図

S D 7 S D 6 の東にある。ほぼ東西に、やや南に弯曲した形状を呈する。長さ1.8m以上、幅40cm、深さは17cmを測る。

S D 8 トレンチ北端に近く検出された。トレンチと直交し、南は未調査である。長さ80cm以上、幅40cm、深さ13cmを測る。

S D 9 S K 5 の東にあり、それを切っている。トレンチに直交する。長さ1.8m以上、幅1.4m、深さは70cmを測る。

S D 10 トレンチ北端に位置し、S D 9と平行している。長さは1.8m以上、幅45cm、深さ42cmを測る。この溝は、中央が両端より深くなっている。

T 2

竪穴住居1棟、土壙7基、溝9条を検出した。

a) 竪穴住居

S H 1 トレンチのほぼ中央で検出された。南東隅が検出されているのみで、東西4.3m以上、南北1.9m以上を測る。深さは26cm程遺存していた。壁溝はなく、柱穴を確認できなかった。東辺を基準にすれば、方位はN27°Wを呈する。覆土は黒色土(黒ボク)である。

b) 土壙

S K 6 トレンチ南端近くに位置する。北半分は未調査であるが、1.5m×50cm以上の隅丸方形を呈すると考えられ、深さは30cmを測る。

S K 7 S K 6 の東で検出された。1m×45cmの南北に長い梢円形を呈し、深さは20cmを測る。

S K 8 トレンチ中央よりやや南西寄りで検出されている。北は調査地区外である。東をピットに切られ、規模は50cm以上×30cm以上、深さは18cmを測る。

S K 9 S D 16 の東にある。南は調査地区外であるが、64cm×58cm以上の梢円形を呈する。深さは10cmを測る。

S K 10 S D 17 を切って掘り込まれている。66cm×54cmの卵型を呈し、深さは25cmを測る。

S K 11 S K 10 の東にあり、北は調査地区外となる。S D 17 と S D 18 に東西を切られており、平面規模は1m以上×45cm、深さ15cmを測る。

S K 12 S D 19 の東端を切り込んで検出されている。1.4m×90cmの平行四辺形を呈する。深さは18cmを測る。

c) 溝

S D 11 S K 6 の南東で検出された。南はピットに切られているが、長さ76cm、幅26cmで東に向って弧状に延びていく。深さは14cmを測る。

S D 12 S K 7 の東にある。長さ1.9m以上、幅3.4mで南北からやや西に振った方向に流れる形状を呈する。深さは73cmを測る。

S D 13 S D 12 の東に平行した形で検出された。長さは2m以上、幅1.1m、深さは25cmを測る。

S D 14 S D 13 の東に約5m離れて平行した形で検出されている。長さ2m以上、幅30cm、深さ13cmを測る。

S D15 S D14の北端にはほとんど接する所より、トレンチに平行して延びている。長さ1.4m、幅は20cm以上を測る。深さは7cm程度である。

S D16 S K 9 の西に位置している。南東から北西へ流れる形状を呈し、長さ1.7m以上、幅1m、深さは55cmを測る。

S D17 S K10に東肩を切られた幅の広い溝である。長さ1.6m以上、幅3.3m、深さ56cmを測り、S H 1 や S D12など多くの溝と同様に南北からやや西へ振った方向に流れる形状を呈する。埋土中から土師器、須恵器、黒色土器が多数出土している。

S D18 S D17の東にあり、トレンチに直交して流れる形状を呈する。長さ1.5m以上、幅1.2m、深さ40cmを測る。

S D19 S D18の東にあり、それと同方向に流れる。西肩は北端で西に大きくふくらむ。長さ1.6m以上、幅2.3m、最大幅は3.1m、深さは50cmを測る。埋土から須恵器が出土している。

T 3

土壤5基、溝1条が検出された。

a) 土壌

S K13 トレンチの中央から南に寄った所で、検出された。1m×86cmの方形を呈し、深さは38cmを測る。

S K14 S K13の東5~6mの所に位置する。1.2m×1m以上の方形を呈し、深さは36cmを測る。

S K15 S K14の北にある。86cm×50cm以上の方形を呈すると考えられ、深さは26cmを測る。土壤の中心と考えられる所に円形のビット状落ち込みが見られる。方形掘形をもつ柱穴になるかも知れない。中央の落ち込みは、底面より15cm程度の深さをもつ。

S K16 S K15の東にあり、S D20に東半分を切られている。1.1m×70cmの方形を呈し、深さは27cmを測る。

S K17 トレンチ東端近くにある。62cm以上×52cmの楕円形を呈する。深さは35cmを測る。

b) 溝

S D20 トレンチの中央を直交して検出された。S K16を切って掘り込まれており、長さ1.7m以上、幅1.1m、深さ17cmを測る。

T 4

土壤5基、溝2条が検出されている。

a) 土壌

S K18 トレンチ西端にあるため80cm×46cm以上の半円形を呈している。深さは35cmを測る。

S K19 S K20と並んで検出され、それに切られている。80cm以上×50cm以上の隅丸方形を呈するものと予想される。深さは11cmを測るが中央に楕円形のビットがあり、さらに17cm深くなる。

S K20 S K19の東にある。1.3m×40cm以上の隅丸方形を呈すると考えられる。深さは44cmを測る。

S K21 S K20の北に位置する。1.8m以上×1mの長椭円形を呈し、あるいは溝とも考えられる。深さは30cmを測る。

S K22 S K21の東で検出されている。94cm×50cm以上の隅丸方形を呈すると考えられ、深さは25cmを測る。

b)溝

S D21 トレンチ西端にあり、S K18と19の中央に狹まれた形で検出されている。長さ1.8m以上、幅1.5mを測り、深さは17cm、東端で落ち込みさらに37cm深くなる。

S D22 トレンチ中央からやや東寄りで検出されている。トレンチに直交し、長さ1.5m以上、幅78cm、深さ32cmを測る。

T 5・6

L字状に連結しているため、一括して説明を加えることにする。土壌6基、溝1条、落ち込みが2箇所認められた。

a)土壌

S K23 L字の屈曲部分に集中して検出された土壌のうち、最も東に位置する。1.2m×45cm以上の方形を呈すると考えられ、深さは13cmを測る。

S K24 S K23の西に隣接する。1.6m×65cm以上の方形を呈するものであろう。深さは13cmを測る。

S K25 S K24の西にあり、それに切られている。1.7m×1.2m以上の方形を呈すると考えられ、深さは3cmであった。

S K26 西トレンチの屈曲部で検出されている。2.5m以上×1.5m以上の平面規模をもち、深さは21cmを測る。埋土中より信楽焼が1点出土した。

S K27 S K26の北西で検出されている。1.4m×1m以上の方形に近い形を呈し、深さは31cmを測る。

S K28 T 6の北西端で検出された。2.6m×1.6m以上の円形を呈すると考えられる。深さは40cmを測る。

b)溝

S D23 T 5の東端近くで検出された。長さ2.5m以上、幅2.8mの幅広い溝と考えられる。深さは41cmを測る。

c)落ち込み

I S K23・24などに切られている。トレンチと直交する形で検出された。西から東に向って傾斜し、落ち込みIIへとつながっていくものと考えられる。深さ30cmを測る。

II S K27のさらに北にあり、T 6を斜めに横切っている。落ち込みIとともに旧地形をそのままトレンチ内に反映させた形となり、高低差は25cmを測る。

T 7

土壌が1基検出されている。

a) 土壙

S K29 トレンチのやや東寄りに北端に接して検出された。6.6m×40cm以上の長楕円形を呈するものであろう。深さは35cmを測る。埋土中より、土師器、縁軸、灰釉が出土している。

T 8

土壙4基、落ち込みが3箇所に認められた。

a) 土壙

S K30 トレンチの屈曲部分で検出された。

1.6m×40cm以上の円形を呈するものと想像される。深さは10cmを測る。

S K31 S K30の南にある。直径90cmの円形を呈し、深さは12cmを測る。

S K32 S K31の西側で検出されている。直径1.1mの円形を呈するものであろう。深さは10cmを測る。

S K33 S K32の南西に位置し、落ち込みVを切って検出されている。直径1.3mの円形を呈するものと想像され、深さは18cmを測る。

b) 落ち込み

III トレンチ東寄りを斜めに切って走っている。南から北へ傾斜し、深さ17cmを測るものである。

IV トレンチの屈曲部分で検出された。南から北へ傾斜し、高さは18cmを測る。

V 落ち込みIVの南西に3m程離れて検出された。南へ向って傾斜し、高低差は20cmを測る。

T 9

土壙9基、溝6条が検出されている。

a) 土壙

S K34 トレンチ東端で検出された。1.6m×68cmの長方形を呈し、深さは7cmを測る。

S K35 S D26の東にある。86cm以上×60cmの楕円形を呈すると考えられ、10cmの深さを測る。底面中央には、さらに10cmの深さを測る楕円形ピットが検出されている。

S K36 トレンチ中央から少し東へ寄って検出された。80cm×66cmのやや歪んだ円形を呈し、9cmの深さを測る。

S K37 S D28の西にある。2.2m×94cmのトレンチと平行する方向に長軸をもつ長方形を呈する。深さは25cmを測る。

S K38 トレンチ中央からやや西寄りで検出された。82cm×44cm以上の楕円形を呈すると考えられ、深さは18cmを測る。

S K39 S K38の西にある。2.4m×70cm以上の長楕円形を呈するものと考えられる。深さは28cmを測る。

S K40 S K39の西で検出された楕円形の土壙である。規模は1.7m×45cm以上で、深さは8cmを測る。

S K41 S K40の西にあり、S K42に切られている。1.4m以上×94cm以上の長方形を呈すると考えられ、深さは14cmである。

S K42 S K41の東で重複して検出されている。90cm以上×94cmの隅丸長方形を呈すると考えられる。深さは40cmを測る。

b)溝

S D24 トレンチ東端に位置している。トレンチには直交し、長さ3m以上、幅60cm、深さは7cmを測る。

S D25 S D24の西にあり、ほぼ同じ方向に流れる形状を呈する。長さ3m以上、幅1.5m、深さ47cmを測る。埋土より瓦質土器が出土している。

S D26 S K35の西に南端を接して検出された。S D24と同方向に流れ、長さ3m以上、幅52cm、深さ16cmを測る。

S D27 S D26の西で検出された。北端部の広がった形状を呈し、長さ2.7m以上、幅1.2m、深さは北端部で34cm、他は13cmを測る。

S D28 トレンチ中央で検出された。トレンチに直交する溝で、長さ2.5m以上、幅26cm、深さ14cmを測る。

S D29 トレンチ西端に位置する。トレンチに直交し、長さ2.1m以上、幅1.3m、深さ55cmを測る。埋土より土師器、信楽焼が出土している。

T 10・11

黄褐色砂礫層が露出し、遺構は全く検出されなかった。

T 12—1

トレンチの東半分はT10・11同様の黄褐色砂礫層が露出しているため、遺構は検出されなかつたが、西半分では上下2層に検出された。上層では、土壙2基、溝2条が検出されている。

a)土壙

S K43 S K44に切られた形態で検出された。1.2m×72cmの卵型を呈し、深さは26cmを測る。

S K44 S D30の西にある。1.2m×80cmの長楕円形の半分が検出されているが、未調査部分を含めると溝になるかもしれない。深さは31cmで南端は一段高くなり9cmを測る。

b)溝

S D30 S K43・44の東にあり、トレンチを直交して流れる形を呈する。長さ2.2m以上、幅80cm、深さは50cmを測る。埋土より土師器が出土している。

S D31 トレンチ西端で検出された。トレンチに直交し、T13がここより直角に延びているため一部そちらで検出される。長さ2.5m以上、幅30～50cm、深さは35cmを測る。

T 12—2

下層も同様に中央から西半分で遺構が検出されている。上層でベースとなった黒色砂質土（黒ボク）層を除去すると、黄色粘質土層上に土壙6基、溝1条、落ち込み1箇所が検出された。

a)土壙

S K77 遺構検出部分の中央で検出された。84cm以上×92cmの卵型を半載した形を呈する。深さは18cmを測る。

S K78 S K77の面に接して検出されている。80cm×70cmの梢円形を呈し、13cmの深さを測る。

S K79 トレンチ西寄りにあり、S K77と同様74cm以上×94cmの半截卵型を呈する。深さは20cmを測る。

S K80 S K79の西にあり、2.3m×1.2m以上の半円形を呈している。43cmの深さを測る。

S K81 T13との肩曲部に位置し、1.5m以上×1.9m以上の不整形を呈する。深さは18cmを測る。

S K82 S K81の西に接している。2m以上×1.2mの梢円形を呈すると考えられ、深さは23cmを測る。

b)溝

S D62 S K77・78の東にある。長さ1.5m以上、幅70cmを測り、中央が一段落ち込んでいる。深さは両端で13cm、中央ではそこからさらに31cm程深くなっている。

c)落ち込み

VI トレンチのほぼ中央で検出された。黒色砂質土（黒ボク）層を埋土したもので、西に向って傾斜している。高低差は約60cmを測る。この落ち込みは、T77とT79の中間付近から西で平坦面に変わる。

T13-1

T12と14に両端が接続している。T12と同様に南約半分が上下2層に分れる。上層では土壤8基、溝4条が検出されている。

a)土壤

S K45 トレンチ南端にあり、S D31を切って掘り込まれている。2m×1.5m以上の円形を呈すると考えられる。深さは1mを測るが、トレンチの壁面観察から、現遺構面よりかなり上層で掘削されたものであることが判明した。

S K46 S K45の東に位置し、1m以上×52cmの長梢円形を呈し、あるいは溝とも考えられる。深さは70cm程度を測る。

S K47 トレンチの中央よりやや南寄りで検出された。1.1m×68cmの水滴形を呈し、深さは10cmを測る。

S K48 トレンチ中央にあり、3つの土壤が接合した形状を呈する。1.7m以上×1.8mで深さは77cm~92cmを測る。

S K49 S D33・34と重複し、それを切って掘られている。96cm×80cmの円形を呈する。17cmの深さを測っている。

S K50 S D33に切られて存在する。1.7m×68cm以上の梢円形を呈し、深さは36cm程度である。

S K51 S K50に接している。80cm×90cmの扇形を呈し、25cmの深さを測る。

S K52 S K51の北にある。1.2m×38cm以上の梢円形を呈すると考えられる。深さは、13cmを測る。

b)溝

S D32 トレンチ北端に、東壁に沿って平行する形で検出された。長さ9.9m、幅44cm、深さ31cm

を測る。

S D33 S D32の西にあり、それと平行する長さ10.3m、幅28cm、深さは8cmを測る。

S D34 S D33の西に平行して接する。長さ2.2m、幅44cm以上、深さ30cmを測る。

S D35 トレンチの西壁に接して検出されている。長さ4m、幅34cm以上、深さは40cmを測る。北端で一段高くなり15cmを測る。

T13—2

T12—2 同様、トレンチ南半分が落ち込んでいる。

a) 落ち込み

VII トレンチの中央から南へ向ってゆるやかに傾斜している。高低差は33cmを測る。

T14

T13から接続するトレンチで、土壤7基、溝10条が検出されている。

a) 土壌

S K53 トレンチ東端に近く、S D39に切られている。1.4m×76cmの楕円形を呈し、深さは7cmを測る。

S K54 S K53の北西にある。1.2m×66cm以上の方形を呈すると考えられ、深さは55cmを測る。底面中央付近に直径25cm、深さ19cmの円形ピットがあり、方形柱穴とも考えられる。

S K55 S K53の西に位置する。76cm以上×70cmの楕円形を呈すると考えられ、深さは14cmを測る。

S K56 S K55より4～5m西で検出された。S D39を切って掘り込まれており、2.1m×1.1mの楕円形を呈する。深さは約60cmを測る。

S K57 S K56の南にある。48cm以上×82cmの楕円形を呈すると考えられ、深さは4cmを測る。

S K58 トレンチ中央よりやや西に寄って検出された。S D42を切り、80cm×60cmの楕円形を呈し、深さは12cmを測る。中央に直径25cm、深さ14cmの円形ピットがある。柱穴かも知れないが繋がるものがない。

S K59 S D43の西端で検出され、それを切っている。82cm×42cmの楕円形を呈し、深さ32cmを測る。

S K60 S K59の南にある。1.5m×34cm以上の不整形を呈し、深さは20cmを測る。

b) 溝

S D36～38 トレンチ東端にトレンチと平行して流れの形状を呈する。S D36は長さ1.2m、幅48cm、深さ24cm、S D37は長さ1.8m、幅34cm、深さ18cm、S D38は長さ2.1m以上、幅1.8cm、深さ11cmをそれぞれ測る。同一線上に並んで検出されているため、もとは同じ溝であった可能性が高い。

S D39 トレンチ東端から中央までを斜めに横切って検出された。長さ29.4cm、幅60cm、深さ2～9cmを測る。

S D40 トレンチに直交し、S D38を切ってS D39に切られた形で検出された。長さ1.9m以上、

幅48cm、深さ6cmを測る。

S D41 S K56の西にあり、S D39から直角にのびている。長さ1.3m以上、幅40cm、深さ6cmを測る。

S D42~44 トレンチ中央から西に向ってS D39とほぼ平行した方位をもって流れる形状を呈する。S D42は長さ8.5m、幅50cm、深さ13~42cm、S D43は長さ2.5m、幅34cm、深さ7cm、S D44は長さ1.3m、幅66cm、深さ16cmを測り、先のS D36~38同様、同一方向に連続して検出されているため、同じ溝であると考えられる。

S D45 トレンチ西端で、S D44とほぼ直交する形でそれに切られて検出された。長さ2.5m以上、幅54cm、深さ58cmを測る。

T 15

溝が1条検出されている。

a)溝

S D46 トレンチ北端に近くで検出され、それに直交する形状を呈している。長さ1.4m以上、幅36cm、深さは9cmを測る。

T 16-1

上層では全面に遺構が認められ、土壌2基、溝1条が検出されている。

a)土壌

S K61 トレンチ東端で検出された。1.9m以上×88cm以上の方形もしくは長方形を呈するものと推測される。14cmの深さを測り、竪穴住居のコーナー部分とも考えられる。

S K62 トレンチ西端にあり、94cm×46cm以上の円形を呈するものと思われる。深さは33cmを測る。

b)溝

S D47 S K61を切って掘り込まれている。長さ1.5m以上、幅70cm、深さは20cmを測る。

T 16-2

下層からは、トレンチの西半分より、溝2条が検出されている。

a)溝

S D63 下層部分を3分する形で直交する2つの溝のうち、東に位置するものである。長さ1.8m以上、幅82cm、深さ76cmを測る。

S D64 S D63の西にある。長さ1.6m以上、幅90cm、深さ25cmを測る。

T 17-1

上層遺構は、トレンチ全面で検出されている。土壌13基、溝14条を確認できた。

a)土壌

S K63 トレンチの南東端近くにある。90cm×82cmのほぼ円形を呈し、深さは19cmを測る。

S K64 S K63の北にある。1m×62cmの楕円形を呈する。深さは27cmを測る。

S K65 S K63・64に切られて検出された。2.7m以上×2.4mの長方形を呈するものと思われ25cm

を遺存する。

S K 66 S D 49の南に位置し、72cm以上×44cmの楕円形を呈すると考えられる。深さは12cmを測り、中層でさらに8cm程度に落ち込む。

S K 67 S D 51の北にあり、それに切られている。1辺60cm以上の方形を呈すると考えられ、深さ8cmを測る。

S K 68 S K 67の北に位置する。1.3m×90cmの三角形を呈し、深さは21cmを測る。

S K 69 S D 54とS D 55に挟まれた位置にあり、S D 55を少し切っている。1.2m×1.1mの方形を呈し、15cmの深さを遺存する。

S K 70 トレンチの北寄りで検出された。直径1.2mの円形を呈し、深さは35cmを測る。

S K 71 S K 70の北にある。1.1m×74cmの楕円形を呈する。深さは30cmを測り、西端に寄って深さ15cmの楕円形ピットが認められる。

S K 72 S K 71に切られて検出されている。1m×82cm以上の深さは55cmを測る。

S K 73 S K 71の北にある。直径86cmの円形を呈し、深さは37cmを測る。

S K 74 S K 73を切っている。1m×55cmの楕円形を呈する。深さは37cmを測る。

S K 75 S D 58の東に位置し、1.3m×62cmの楕円形を呈する。深さは8cmを測る。

S K 76 トレンチ北端で検出されている。70cm×58cm以上の円形を呈するものと考えられる。深さは38cmを測る。

b)溝

S D 48 トレンチ南端近くにある。トレンチを横切る形状に延び、長さ2.5m以上、幅18cm、深さ5cmを測る。

S K 49 S K 66の北で検出された。長さ2.8m以上、幅58cm、深さ19cmを測る。

S D 50 S D 49の西端と接した形で検出されている。長さ5.2m以上、幅36cm、深さ11cmを測る。S D 49とはほぼ直交する。

S D 51 S D 50を切って検出され、ほぼ直交している。長さ3m以上、幅32cm、深さ8cmを測る。

S K 52 S K 68の東で検出されている。長さ88cm、幅26cm、深さ17cmを測る。

S D 53 S K 69の南にあり、S D 50と平行する。長さ3.2m以上、幅1.2m、深さ29cmを測り、中でさらに幅76cm、深さ25cmの細い溝をもつ。

S D 54 S D 53を切って直交する。長さ3m以上、幅54cm、深さ15cmを測る。

S D 55 S D 53の北端から大きく弧状に延びる。長さ6.5m以上、幅42cm、深さ12cmを測る。

S D 56 S K 70の北にあり。S D 57に切られ、長さ90cm以上、幅40cm、深さ28cmを測る。

S D 57 S D 56を切った形で検出された。長さ1.3m以上、幅50cm、深さ35cmを測る。

S D 58 S K 75の北に位置する。長さ2.7m以上、幅70cm、深さ31cmを測る。

S D 59 S D 58の北にあり、トレンチとほぼ直交する。長さ1.4m、幅92cm、深さ38cmを測るが、両端はさらに落ち込み、深さ72cmを測る。

S D 60 トレンチの北端にあり、方位はほぼ南北を向く。長さ4.3m以上、幅70cm、深さ20mを測

る。

T17—2

トレンチの南北両端で検出されている。土壌5基、溝3条、落ち込み1箇所が確認されている。

a) 土壌

S K83 トレンチ南端にある。1.1m×50cm以上の円形を呈すると考えられ、深さは51cmを測る。

S K84 トレンチ北端で確認された。2m×1.2m以上を呈し、深さは17cmを測る。北端で深さ26cmに落ち込む。

S K85 S K84の北にある。1.2m×1mの不整円形を呈する。深さは20cm位である。

S K86 S K85の北に位置している。1.3m×62cmのひょうたん形を呈し、40cmの深さを測る。

S K87 トレンチ最北端にある。1.5m以上×1.1m以上で、深さは7cmを測る。

b) 溝

S D65 S K83の北で検出されている。長さ1.6m以上、幅1.3m、深さ47cmを測る。

S D66 トレンチ最北端にあり、両端をS K86・87に切られている。長さ78cm以上、幅34cm、深さ18cmを測る。

c) 落ち込み

VII S D65の北にあり、トレンチとほぼ直交している。北から南へ向ってゆるやかに傾斜し、高差は54cmを測る。埋土は黒色土（黒ボク）である。（三宅）

遺物

各遺構から多くの遺物が出土したが、そのすべては土器、陶磁器類であった。それらのうち、図示し得たのは62点である。では遺構毎に分類して記述していくことにする。

a) 土壌出土土器（1～5）

S K26 信楽と考えられる鉢の底部片(1)である。復元底径21.8cmを測る。

S K29 3点出土した。2は土師器の甕であろう。短く外反する口縁部に両端をつまみ上げる端部がつづく。調整は内外面に斜めのハケ目を施している。口径16.6cmを測る。3は綠釉の椀である。口径14.2cmを測る薄手の体部、口縁部が外土方へゆるやかに開きつつのがる。端部は少し外反させている。4は灰釉の椀であろう。内窯気味にのびる体部、口縁部は、端部で短く外反する。淡灰色の素地に釉が濁けがけて施工される。口径13cmを測る。

S K48 信楽の擂鉢である。1cm前後の小石を含む粗い胎土をもち、赤褐色に焼成されている。内面に4条1組の擂目が施工される。底径は12.6cmを測る。

b) 溝出土土器（6～39）

S D17 合計10点の土器を図示できた。6は土師器の皿である。口縁部が短く内窯気味に立ち上がり、端部は丸く收めている。内面の端部に煤が付着している。口径13.5cmを測る。7・8は須恵器の杯蓋である。どちらも平らな天井部から口縁部が内窯気味にのび、端部を垂直につまみ出すものである。7は口径15.2cm、器高1.7cm、8は口径15.6cm、器高2.3cmを測る。調整はともにヨコナデ主体であるが、8は天井部外面に回転ヘラ削りを施している。9～11は須恵器の杯身であ

る。9は体部以上の破片で口径15.7cmを測る。口縁部はほぼまっすぐに外上方に向ってのび端部は丸く収めている。10・11はB類の底部である。どちらも底端部から少し内側に外方へふんばつた断面台形の高台が貼り付く。底径は10が9cm、11が13cmを測る。12～13は黒色土器の椀である。12・13は体部以上の破片で、内弯する体部から口縁部が外反し、端部の内側に1条の沈線を施すものである。口径は12が13.2cm、13が14cmを測る。どちらもA類である。14・15は高台周辺の破片である。14は高台が断面台形の外方へふんばるタイプで、底辺が5cmを測る。15は半たい台形の高台が付くもので、底径は6cmを測る。どちらもA類である。15は見込みにヘラミガキが施される。16は須恵器の壺であろう。丸味をもつ底部から体下部が垂直にのびるもので、体部の外面に一条の沈線が巡る。調整は、外面底体部の境に回転ヘラケズリ、内面はヨコナデを施している。

S D 23 3点図示し得た。17は須恵器の杯身B類である。底部近くに断面台形の扁平な高台を貼り付けるもので、底径12.6cmを測る。18は信楽の擂鉢であろう。端部を外方へつまみ出し、先端に沈線が1条巡る。口径21.8cmを測る。19は瀬戸の平碗である。底部に断面台形の低い輪高台を削り出し、内面には淡緑色の釉を施している。

S D 25 瓦質の火鉢（20）が1点出土している。3～4方に貼り付けられた脚の付け根の破片である。脚部は縦に面取りを施し、外面の体部下端に雷文を施している。

S D 29 4点出土した。21は土師器小皿である。外反する口縁部に端部が丸く収められるもので、口径9cm、器高1.9cmを測る。端部の内外面に煤が付着している。灯明皿に使用されたものであろう。22は黒色土器の鉢であろう。口径32cmを測るもので、内弯する口縁部が肥厚してのび、端部を内側へ屈曲させて丸く収める。内面に斜めのハケ目を施す。23・24は信楽で、23は水蒸し、24は擂鉢であると考えられる。23は直立する口縁部をもち、端部を内外に肥厚させて蓋受けを作る。口径19.6cmを測る。24は浅く開いた口縁部から、端部を短く外反せるもので、内面に段を持つ。擂目は4条1組である。

S D 30 土師器小皿（25）が1点出土した。口縁部が短く内弯し、端部を丸く収めるもので、口径9cm、器高1.5cmを測る。

S D 52 土師器（26）が1点出土している。底部の中央が少しもち上がり、口縁部が内弯するもので、端部はつまんで尖らせる。口径9.4cmを測る。

S D 61 9点の土器が検出された。27は土師皿である。内弯する口縁部をもち、端部は丸く収める。口径15cmを測る。28は須恵器の杯身B類である。断面台形の高台が貼り付き、底径は7.6cmを測る。29は須恵器の杯蓋である。平らな大井部から口縁部が内弯するもので、端部は垂下させる。口径12.6cm、器高2cmを測る。30～34は黒色土器椀である。30～32はいずれも体部上半の破片である。内弯気味にのびる口縁部と体部内面に1条の沈線をもつ。外面下半にはいずれも指圧痕が残り、32は内面にヘラミガキを施している。33は平らな底部に断面三角形の高台が付く。口縁部は内弯気味にのび、端部内面に1条の沈線が巡る。内面にはやや密に、外面には粗くヘラミガキを施している。34は底部の破片である。丸味のある底部に断面三角形の高台が貼り付けられる。

35は瓦器碗である。丸底に断面台形の高台が外方へふんばった形で貼り付く。口縁部は内弯気味に開き、端部内面に段をもつ。内面は口縁部にナデの後、横方向の密なヘラミガキ、底部にラセシ状の暗文を施している。口径16.1cm、器高4.4cmを測る。

S D 63 土師皿が三点出土している。36は口径8.2cm、器高1.3cmを測る浅い小皿で、完形で出土した。37はほぼ完形で出土し、口径9.1cm、器高1.7cmと36よりやや深めで、平らな底部から口縁部がまっすぐに外方へ開いて立ち上がる。38は口径16.4cm、器高2.6cmの大型の皿で、平らな底部から内弯気味に口縁部がのびる。

S D 65 土師器甕（39）が1点出土している。口縁部は大きく外反し、端部を上方へつまみ出している。内外面の頸部に斜めのハケ目が施される。口径18.6cmを測る。（三宅）

4. ま と め

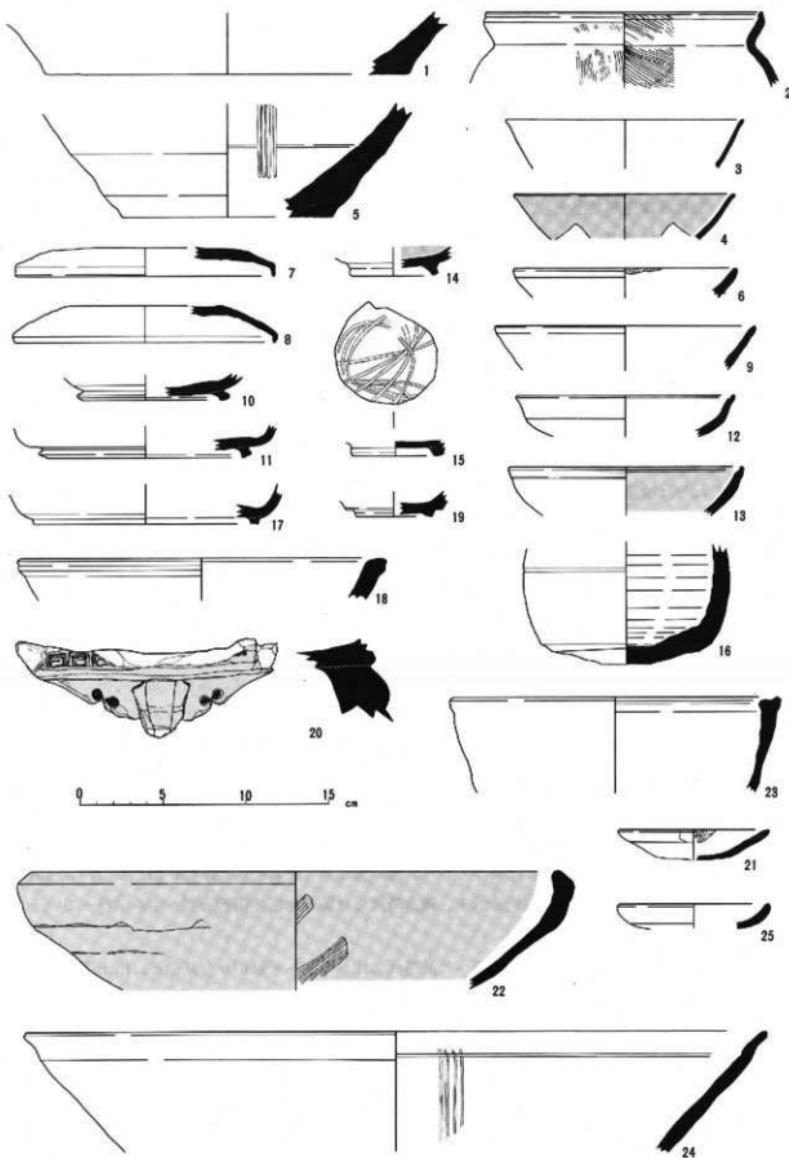
上下遺跡の調査は、前年度の試掘調査結果から、排水路部分のみの調査であった。調査トレンチは、対象部分の周辺をとり巻く形で設定された。現地の旧地形を見るならば、北部と東部と南部にそれぞれ微高地があり、北部と南部を調査できた。しかし、トレンチの幅が2m～2.5mと狹少なため、予想された程の遺構や遺物は検出できなかった。

T 2では竪穴住居が一棟検出されている。トレンチの北西部分（国道8号線側）が、国道の橋梁化工事の際に削り取られていたこともある、南コーナーを中心とした約4分の1程度の面積しか検出されなかった。竪穴住居の遺存深度は40cmと比較的残りが良く、埋土より若干であるが平安時代の土師器が出土している。その他、同時期の遺物が出土した遺構として、SK 16・29・63、SD 17・19・65、P 2・5・9・10・15が挙げられる。これらは、調査対象地の各方面で検出される遺構である。SB 1より古い時期の遺物を出土するものとして、T 9のP 4がある。ここからは奈良時代後半の須恵器が見つかっているが、他の平安時代遺構群の中にも8世紀後半の遺物は混入しており、大きく奈良時代後半から平安時代（10世紀頃）と考えて差し支えないものと思われる。

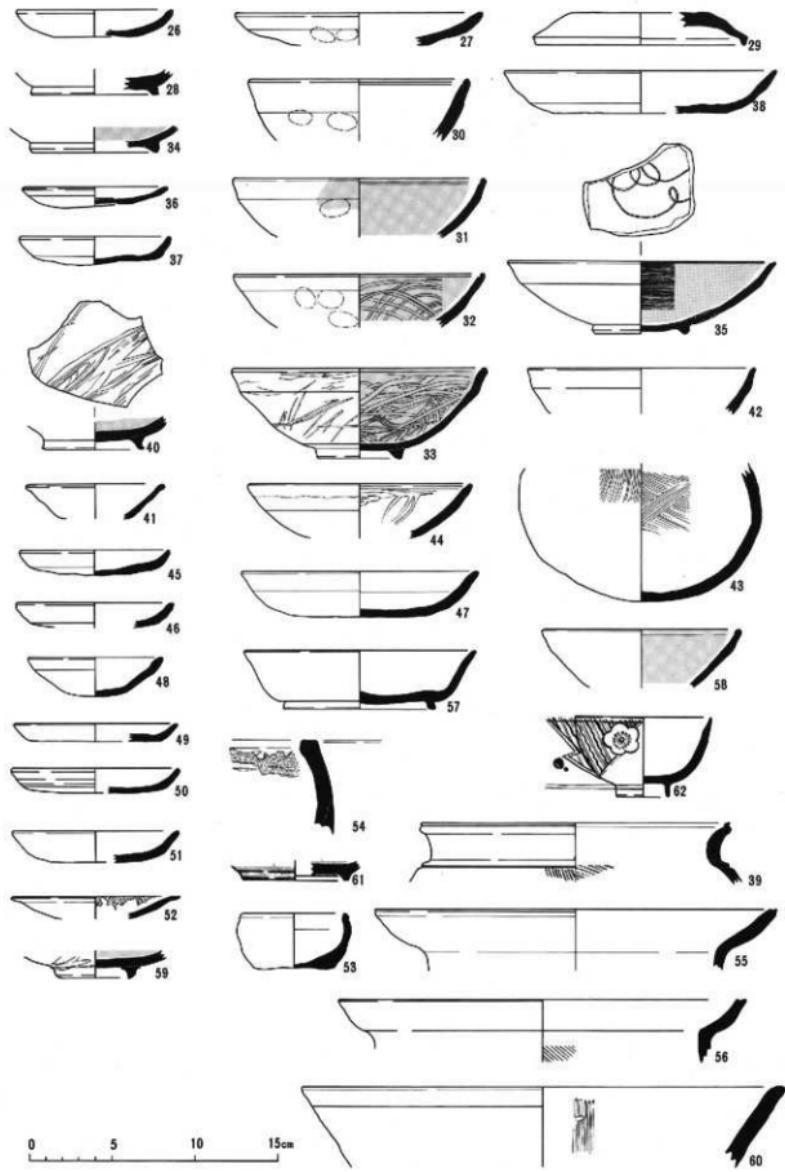
次に、鎌倉時代の遺構としては、SK 43、SD 30・61・63、P 11・16・17がある。これらは、いずれも調査地区の南～南西に片寄っている。他にも混入で鎌倉時代の遺物が出土している遺構はSD 29・52、P 3で、同様な傾向を示す。鎌倉時代には調査地区の南西方面へ中心が移っていったのだろうか。

室町時代には、調査地区の東～南西へと前時代に比べて東への拡がりを見せる。出土遺構としては、SK 26・27・28・48、SD 23・25・29・60・61である。

以上、大雑把に土器を出土した遺構の片寄りからその中心を探っていったわけであるが、上記の遺構の中でも特に遺物出土量の多いSK 29、SD 17、SD 61・63、P 16、SD 23・29などは、それぞれの時期を代表する遺構であると言って差し支えない。（三宅）



第4図 出土遺物実測図



第5図 出土遺物実測図

第2章

常衛遺跡

第2章 近江八幡市 常衛遺跡

1. 位置と環境

常衛遺跡は、近江八幡市西生来町に所在する。この周辺は、愛知川と日野川の堆積した花崗岩や湖東流紋岩の土砂で形成された低地で、湖東平野と呼ばれる。湖東平野には、標高140m～160mの湖東島状山地が点在し、常衛の付近にも観音寺山と箕作山が北と東に存在し、南には瓶割山が見える。これらの島状山地は、扇状地の地下に伏流する日野川や愛知川の水を堰きとめる形となり、山々の東には湧水箇所が数多く見られる。

遺跡の周囲には、旧石器時代の吉ヶ郷遺跡、縄文時代の安土弁天島遺跡などが挙げられるが数は少ない。

弥生時代には、前期に長命寺湖底遺跡・堀上遺跡があり、中期には出町遺跡・浅小井遺跡などが知られている。中期の遺跡の多くは後期後半頃まで存続しているようである。

古墳時代には、出町遺跡・三明遺跡・勤学院遺跡・安土町恵恩寺遺跡・小中遺跡などが挙げられ、古墳としては前期に安土瓢箪山古墳・曾野山古墳が見られ、中期以降は出雲山古墳・千僧供古墳群・岩倉山北古墳群・安土町常楽寺古墳群・桑実寺古墳群など多数見られる。

古代の遺跡としては、金剛寺遺跡・勤学院遺跡・後川遺跡など掘立柱建物が検出された遺跡の他、桑実寺A・B遺跡や中尾遺跡などのように長期間にわたって存続した遺跡もある。

中世紀以降では、觀音寺城を中心として、長光寺城、長福寺城、安土町常楽寺城、特別史跡安土城などの中世城郭が数多く築かれている。また、谷氏館跡、九里氏館跡など城主の館、あるいは地方豪族の居館としての館跡も各地に見られる。

(三宅)

2. 調査の経緯

常衛遺跡は近江八幡市西生来町地先に所在する。昭和58年度に遺物散布地として発見され、「昭和60年度滋賀県遺跡地図」等によって周知されるところとなった。これまでに昭和59年度と昭和60年度の二度にわたる発掘調査が実施されており、縄文時代中期の土坑、古墳時代（6世紀～7世紀）の堅穴住居、平安時代（9世紀）の掘立柱建物などが検出されている。

県農林部の計画する平成元年度は場整備事業（近江八幡市西生来地区）は、この遺跡にかかるため、工事に先立つ埋蔵文化財の調査を実施し、遺跡の保護策が講じられることとなった。調査はまず遺跡の範囲とその深度にかかる資料を得るために、工事による切土および排水路計画箇所について $2\text{m} \times 3\text{m}$ を基本とする試掘坑を35箇所設定した。試掘調査の結果、次節で報告するような範囲において遺跡の存在が確認されるに至ったため、関係部局間の協議により、工事による直接の影響が避けられないと判断された箇所について、本格的な発掘調査を実施し記録の収集と保存がはかられることとなった。現地調査は平成元年7月～8月に三宅、平井、北村を担当として実施し、ひきつづき平成2年3月までを整理調査期間とした。

(北村)

3. 調査結果

I. 試掘調査

(1) 排水路計画箇所 包含層である灰褐色系土、褐色系土、黒色系土のうち、灰褐色系土の堆積がほとんど見られない。T21、22は最下層に茶褐色砂質土があり、T14、23～32、34は黄色系土が堆積している。T21では表土下30cm～50cmで、T29では表土下25cm～70cmで、T32では表土下35cm～80cmでそれぞれ平安時代の土器を含む土層の堆積がみられる。またT23～25では表土下35cm～50cmで黄色系土による遺構面の形成が確認され、T32、34では表土下65cm～80cmで褐色系土による遺構面形成が認められる。

(2) 切土計画箇所 切土面における遺構面および包含層は、表土下40cm～60cmとやや深いところで形成されている。ほぼ全域にわたって灰褐色系土がみられるが、切土面での包含層はそのひとつ上層に位置している。ここで包含層として確認できるのは、T11の褐色系土とT19の黒色系土である。褐色系土は表土下50cm～135cmにおよび、黒色系土は表土下60cm～120cmにおよぶ厚い層を形成している。遺構面はT17で黒色系土に形成されている。出土遺物はT19から第9図に示した平安時代前期の土師器坏が2点出土している。(1)、(2)とも平らな底部からゆるやかに内弯する口縁部をもつ。端部は内側に折り込むように軽く屈曲される。(1)は口径12cm、器高3.2cm以上、(2)は口径14.4cm、器高3.1cm以上を計る。色調はともに淡い橙色を呈している。

今回の試掘調査では、黒色系土の上面および下面に遺構面の形成がおこなわれた可能性が高いが、両遺構面の時期差については不明である。

(三宅)

II. 発掘調査

(1) 調査の方法

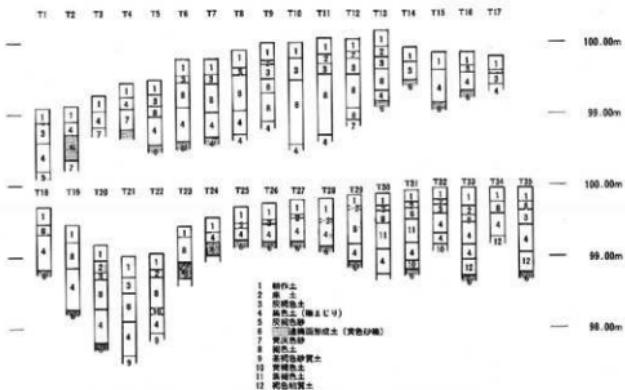
本格的な発掘調査の対象地は東海道新幹線北側の新蛇砂川放水路線東岸（右岸）に隣接する。工事計画では第1-1号小排水路にあたる。

調査はまず対象地を障害物等により3地区に分け、北から順にA地区、B地区、C地区と称することよりはじめた。A地区より順に0.4m級バック・ホールを用い、耕土と深土を分離しつつ遺構面直上まで掘り下げたのち、人力により遺構面を精査し、写真および実測図等により記録の収集と保存に努めた。なお実測図の作成にあたっては、計画中の新蛇砂川のセンター・ポイントを東方に22m平行移動し、これを測量の基準とした（第8図）。

(2) 調査の結果

A地区 調査区の最北部に位置するトレンチで幅約2m、長さ約53mを測る。新蛇砂川のセンター・ポイントではおおむねNo.94+53～No.95-07平行区间にあたる。遺構検出面はくすんだ黄色砂礫層の上面で、標高は約98.31m～99.18mを測り、南に高く北に低い。土層の堆積状況から、標高の低い北側は沼地もしくは低湿地等になる可能性が指摘される。当該地は調査範囲内で唯一湧水のあった箇所でもある。

S A 0 1 S X 0 2 の南側で検出された壠状の遺構である。方位はN約19°Eを指し、長さは11m



第7図 試掘トレンチ配置図、試掘トレンチ土層柱状図

以上ある。柱穴は円形が基本で、検出面での規模は最大のものが直径約62cm、最小のものは約26cmを測る。柱間距離はおおむね3mが標準とみられるが、その距離は一定でない。柱はルーズな間隔で配列されることから、仮設の「杭列」程度のものである可能性が指摘される。

S X 0 1 トレンチの北端で検出された北東—南西方向に長い土坑状の遺構である。検出面での規模は短軸約82cm、長軸約190cmで、底面までの深さは約10cmを測る。埋土は多量の砂を含んだ黒色土であった。遺物の出土はなかった。

S X 0 2 S A 0 1 の北側で検出された不整形な椭円形状の遺構である。検出面での規模は、短軸約50cm、長軸70cm以上を測り、底面までの深さは約21cmある。埋土は少量の砂を含む黒色土であった。遺物は出土しなかった。

S X 0 3 S A 0 1 の南側で検出された長方形状の遺構である。検出面での規模は短辺約90cm～100cm以上、長辺250cm以上を測り、底面までの深さは約35cmである。埋土は砂を含んだ黒色土で、遺物の出土はなかった。

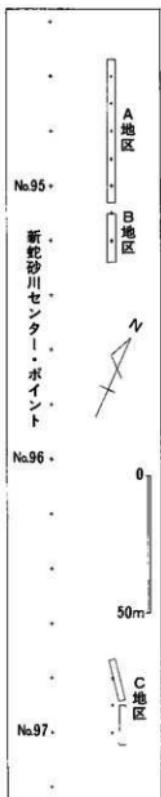
S X 0 4 S X 0 3 の南に近接して検出された遺構である。検出面での南北幅は最大約78cmをはかる。底面までの深さは約18cmで、南側はテラス状を呈し浅くなっている。埋土は砂を含む黒色土で、遺構の出土はなかった。

S X 0 5 S X 0 4 と規模、形状とともに類似した遺構である。検出面での南北幅は最大80cmをはかる。底面までの深さは約14cmあり、底面においては直径約24cm、深さ約10cmのピットが検出された。埋土は砂を含んだ黒色土で、遺物の出土はなかった。

S X 0 6 トレンチの南端近くで検出された円形の土坑状遺構で、検出面での直径は約136cmをはかる。底面までの深さは約73cmある。埋土は粘土の礫を多数含んだ砂の多い黒色土で約60cm程度掘り進んだところで湧水がみられた。当該遺構からは、第9図(3～7)に示す大型土器の部体と推定される土器片5点が出土した。いずれの土器も外面・縁位のケズリ・内面・ナデという共通する器面調整を有し、砂を含んだ粗い胎土で、ややあくまで焼成され、外表面は黄褐色、内面は灰褐色を呈している。接合はできないが、同一個体である可能性は高い。小片であるため土器片の示す時期等については特定できないが、既往の調査例や土器の観察等からは繩文土器の可能性がある。

B地区 A地区の南側に位置するトレンチで、A地区とは里道を狭んで隔てられる。幅約2m、長さ17mを測り、新蛇砂川のセンター・ポイントではおおよそNo.95+10～No.95+28平行区間にあたる。遺構検出面はA地区と同様の黄色砂疊層の上面で、標高は約99.14m～99.20mを測り、ほぼ平坦である。

S X 0 7 トレンチの北側で検出されたピット列で、中心間距離で約60cmの間隔をもって、3個



第8図
発掘調査トレンチ配置図
S=1/2,500

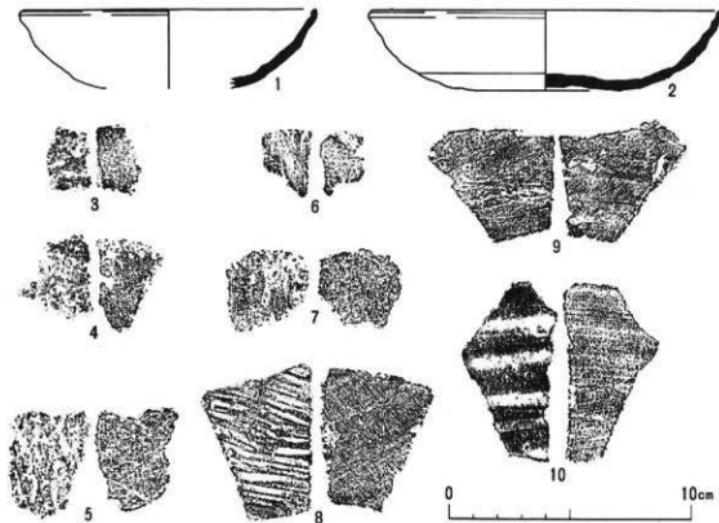
のピットが並ぶ。ピット列の性格についてはわからないが、それぞれのピットは同様の平面形状（不整形な方形）、同様の規模（一辺約50cm、深さ約18cm）であるという点は注目される。

S X 0 8 トレンチの南側で検出された不整形の土坑状遺構で、短軸約56cm、長軸約148cmを測る。深さは約25cmで、埋土は砂の多い黒色土である。遺物の出土はない。

C地区 調査区の最南部に位置するトレンチで、幅約2m、長さ約28mを測る。新蛇砂川のセンター・ポイントでは、おおよそNo96+74～No97+04平行区間に位置する。遺構検出面はくすんだ黄色砂質土層の上面で、標高は約98.98m～99.23mを測り、北側にやや低い。

S A 0 2 南側のトレンチの北側で検出された柱列である。方位はN約35°Wを指し、長さは6.4m以上を測る。柱穴は35cm程度の円形を呈すものが基本で、柱間距離は約1.6mが標準とみられる。西側へ延びて、掘立柱建物となる可能性がある。

S X 0 9 北側のトレンチの中央で検出された。埋土は砂や小礫を含んだ灰色土で、耕土直下より掘り込まれていた。当該遺構からは第9図（8～10）に示す土器片が出土した。(8)は須恵器の甕体部片で色調は灰色を呈し、内面はナデ、外面には平行線状文の叩き締め圧痕が観察される。(9)は陶器の甕の体部片で色調は淡い橙色を呈す。内外面ともにナデ調整が観察される。器面への施釉、塗鉄等は認められない。(10)は陶器片で外面には暗褐色の鉄釉が厚く施され、内面はナデ調整後の塗鉄が観察される。
(北村)



第9図 出土遺物実測図 S=1/2

4. ま　と　め

調査の結果、柵列状遺構、土坑状遺構のほか、多数のピット等が検出され、わずかながらも、かつての人々の生活の痕跡が確認できた。今回のA地区で検出されたS A 0 1は昭和60年度の第3トレンチで確認された平安時代のS A 1と方位をほぼ同じくすることから、これについては当該期の遺構である可能性がある。また、A地区的S A 0 6からは、縄文土器片と推定される遺物の出土があった。これについても、同様に昭和60年度の第9トレンチで縄文時代中期の土坑が検出され、多数の土器等が出土していることから、当該期の遺構である可能性が指摘される。

以上のように、今回の調査では、これまでの調査を裏付ける結果が得られた。ただし、調査地の北側は沼地状の低湿地であると推定されるなど、この付近は集落の西端である可能性が高い。

(北村)

参考・引用文献

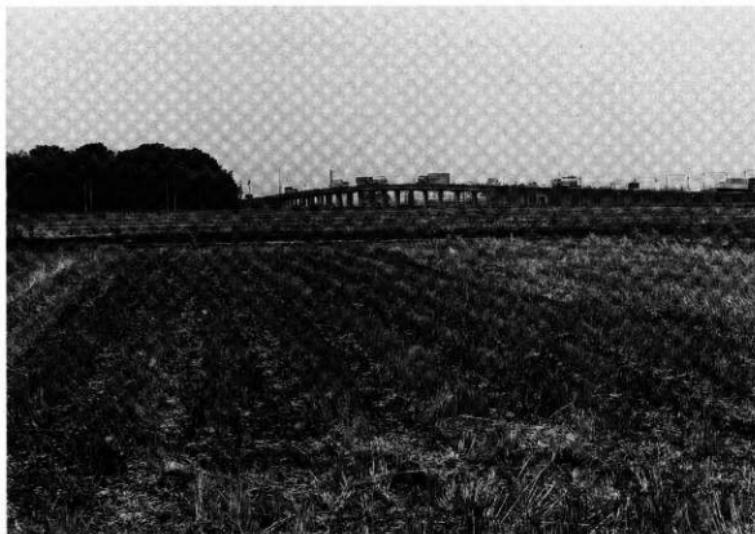
滋賀県教育委員会『昭和60年度 滋賀県遺跡地図』1986年 滋賀県教育委員会

田路 正幸 他『ば場整備関係遺跡発掘調査報告書 第一-3』1985年 滋賀県教育委員会、財滋賀県文化財保護協会

蘇宮 正『ば場整備関係遺跡発掘調査報告書 第III-5』1986年 滋賀県教育委員会、財滋賀県文化財保護協会、近江八幡市教育委員会

岩崎 直也 他『近江八幡市遺跡分布調査報告書』1988年 近江八幡教育委員会

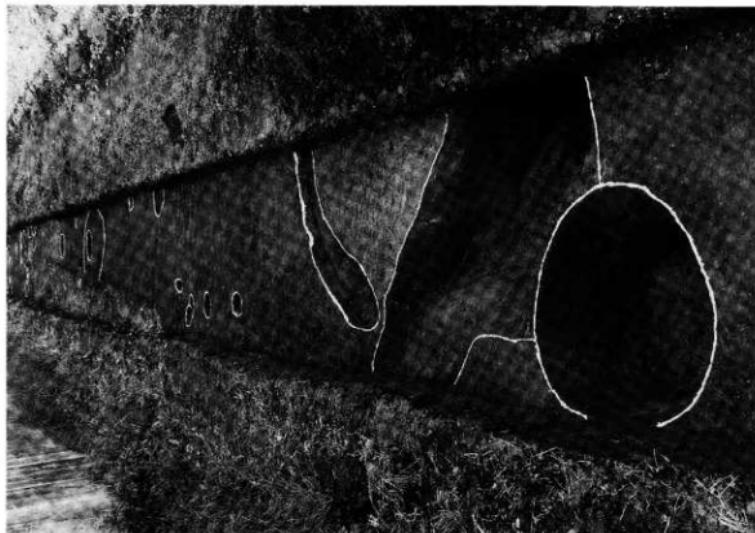
図 版



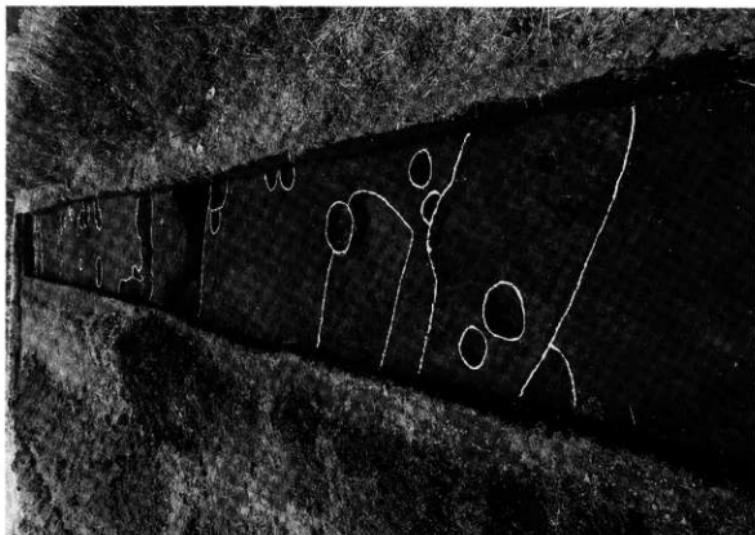
調査前状況



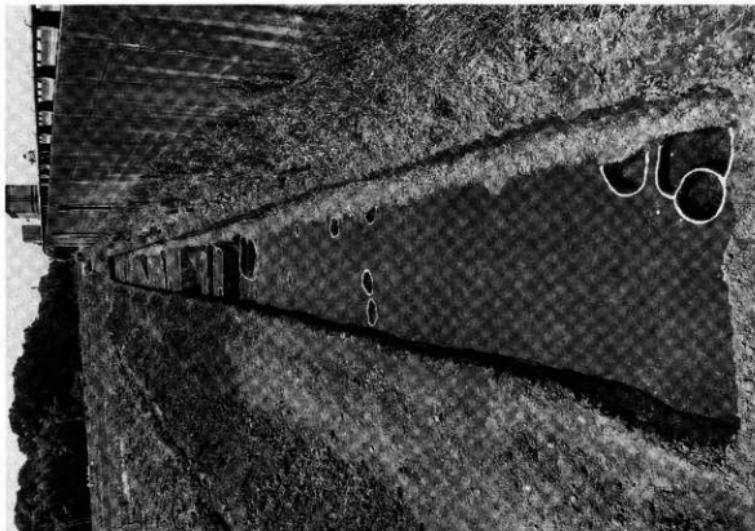
作業状況



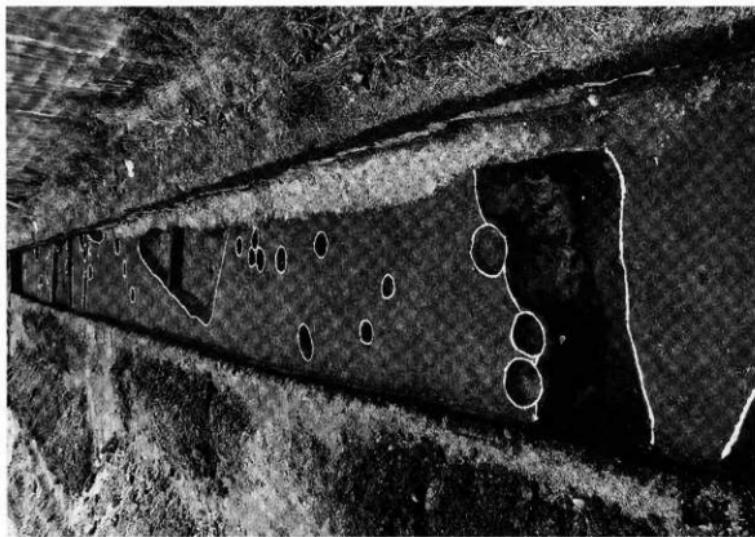
T 1 全景（南から）



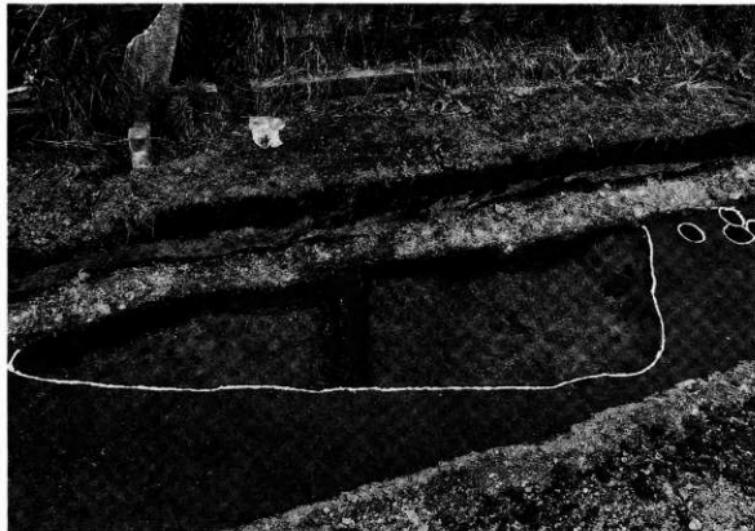
T 1 全景（北から）



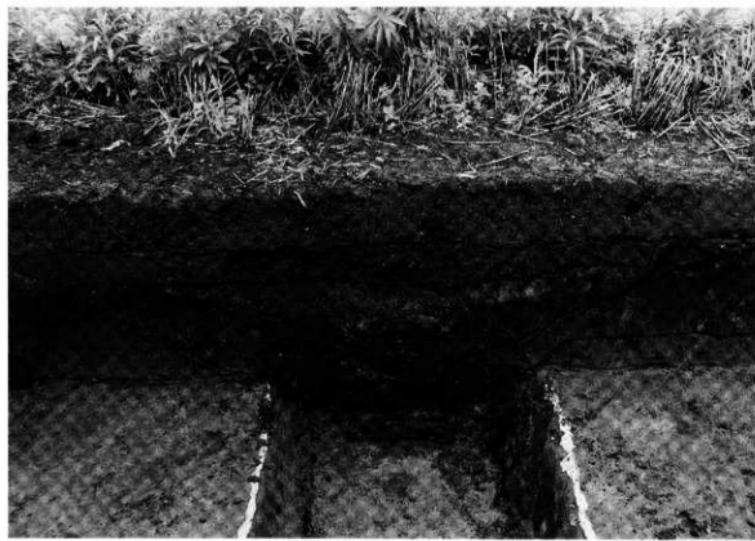
T 2 全景 (北から)



T 2. 全景（北から拡大）



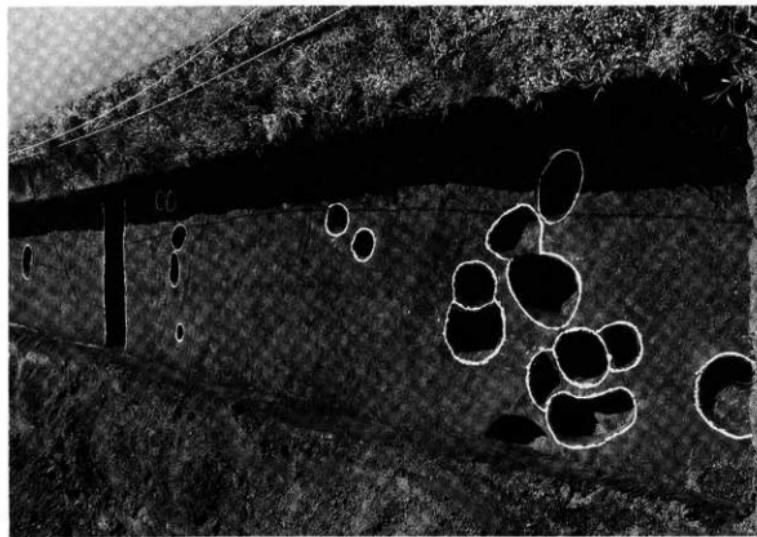
T 2、SB 1 検出状況



T 4、SD 22 と断面



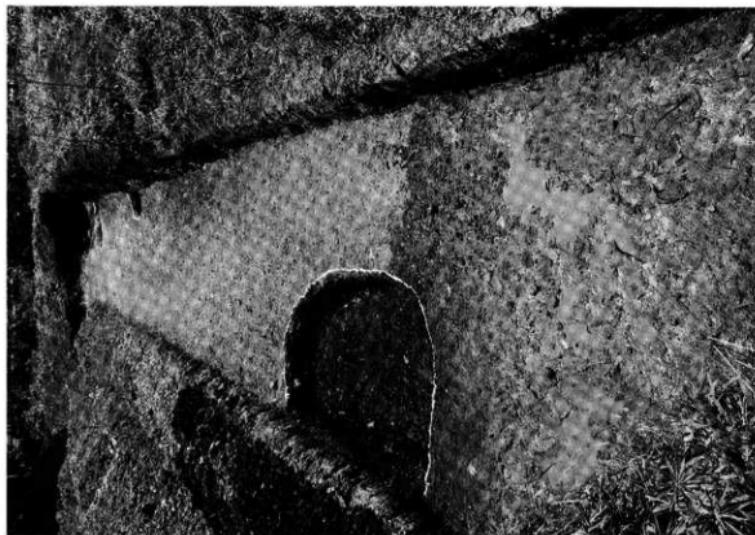
T 3 全景（南から）



T 4 全景（北から）



T 5 全景（西から）



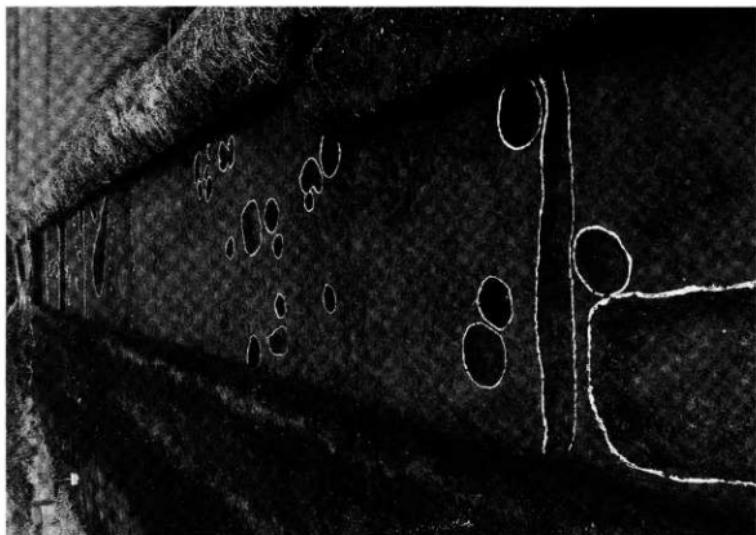
T 6 全景（北から）



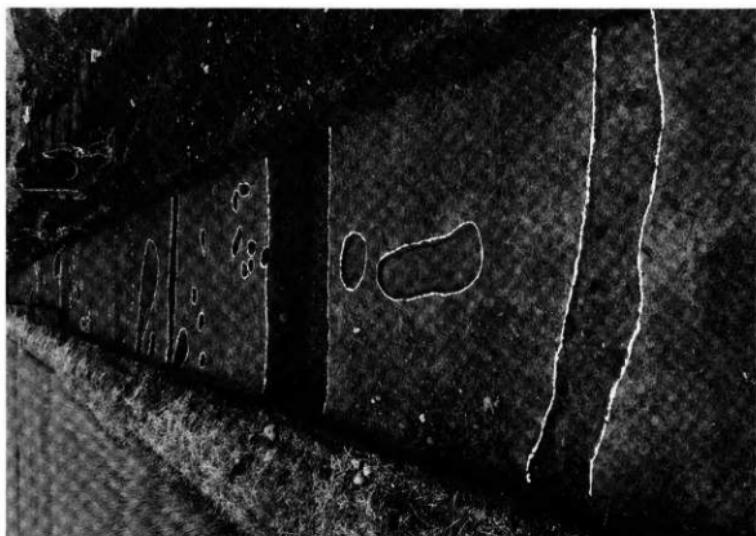
T 7 全景（東から）



T 8 全景（東から）



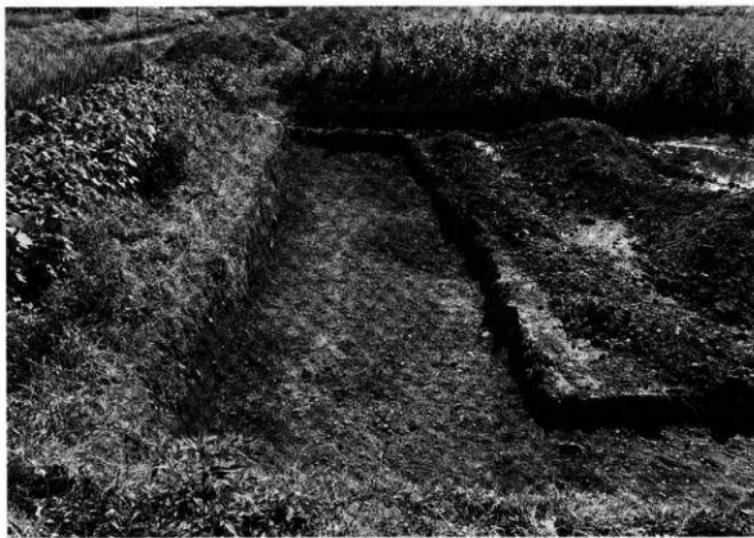
T 9 全景（南から）



T 9 全景（北から）



T10全景（東から）



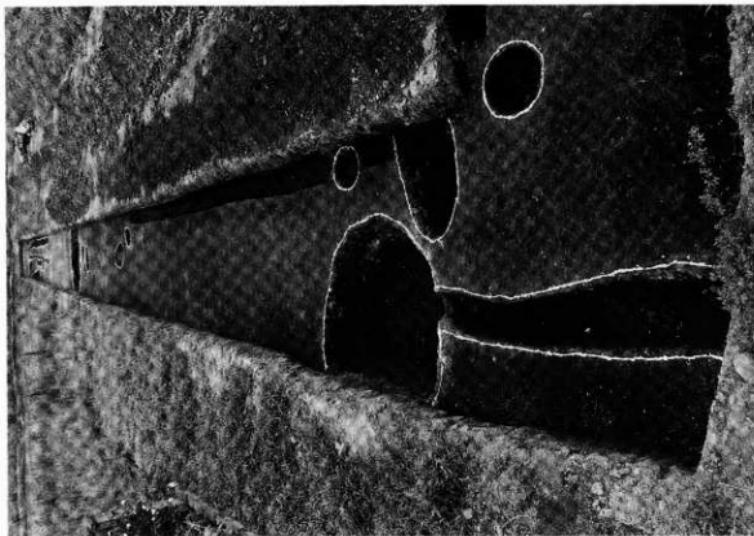
T11全景（東から）



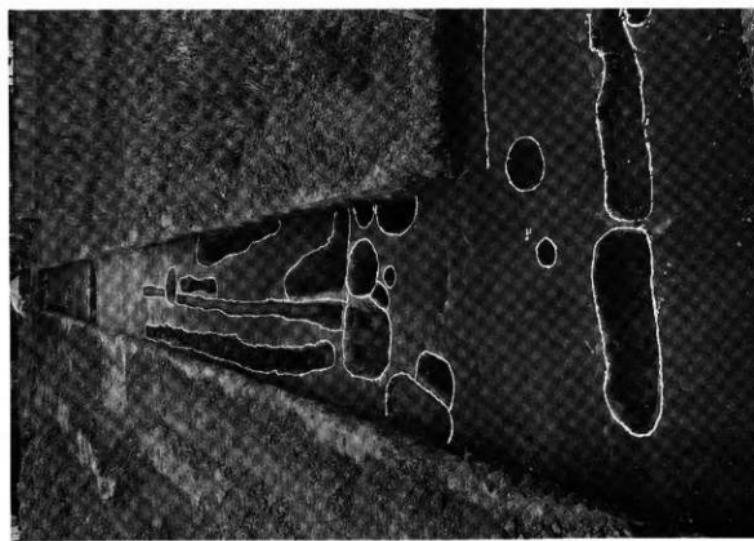
T12全景（南から）



T12下層全景（南から）



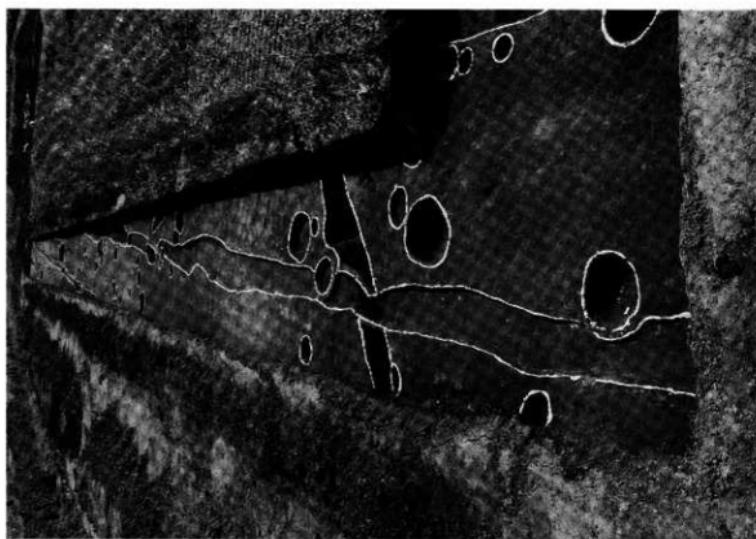
T13全景（東から）



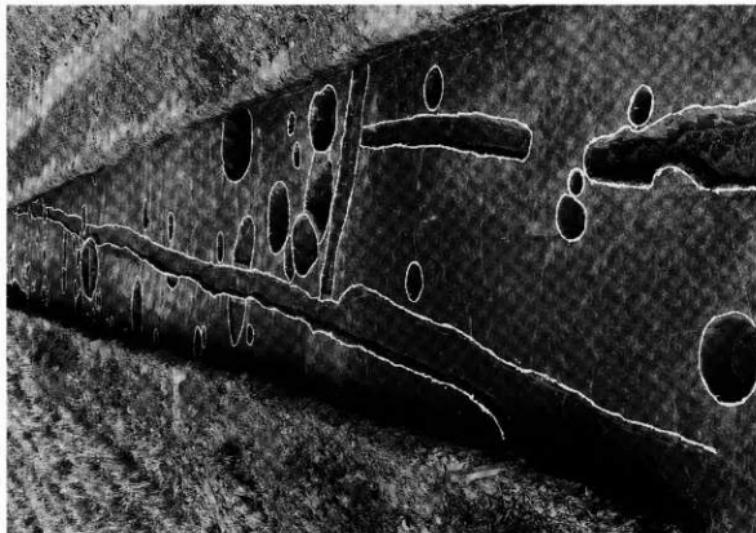
T13全景（西から）



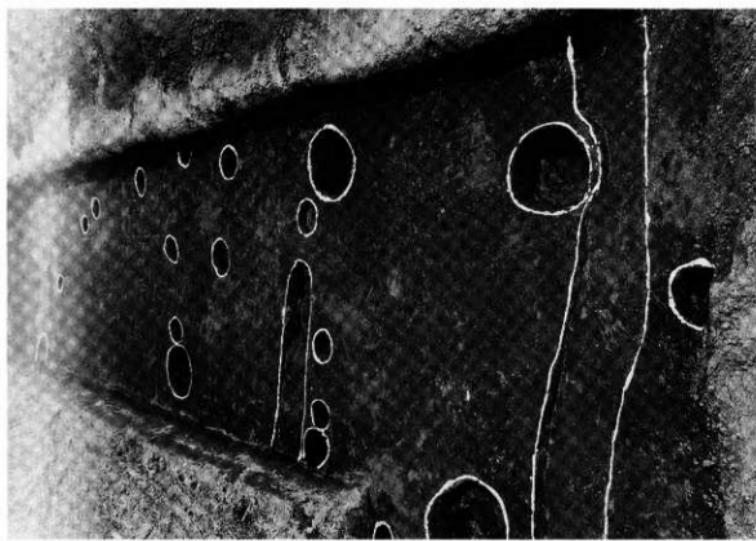
T13下層全景（東から）



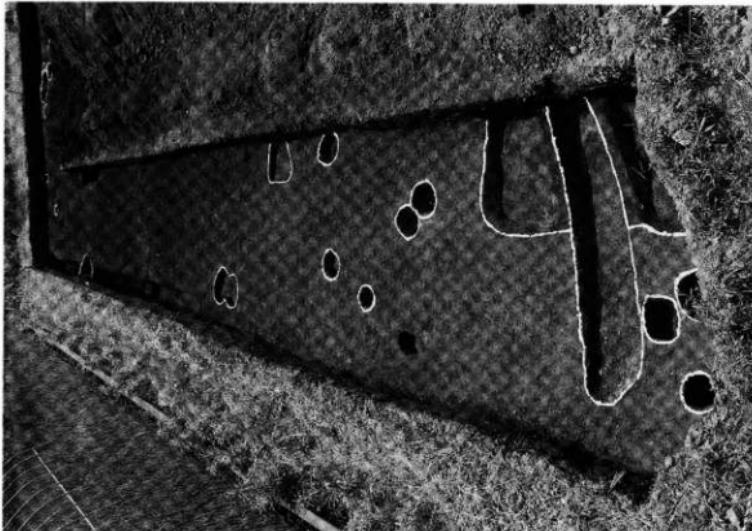
T14全景（南から）



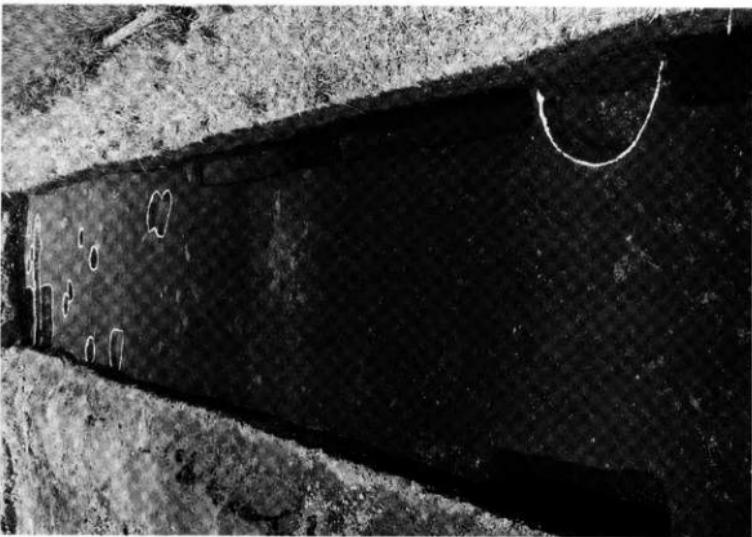
T14全景（北から）



T15全景（西から）



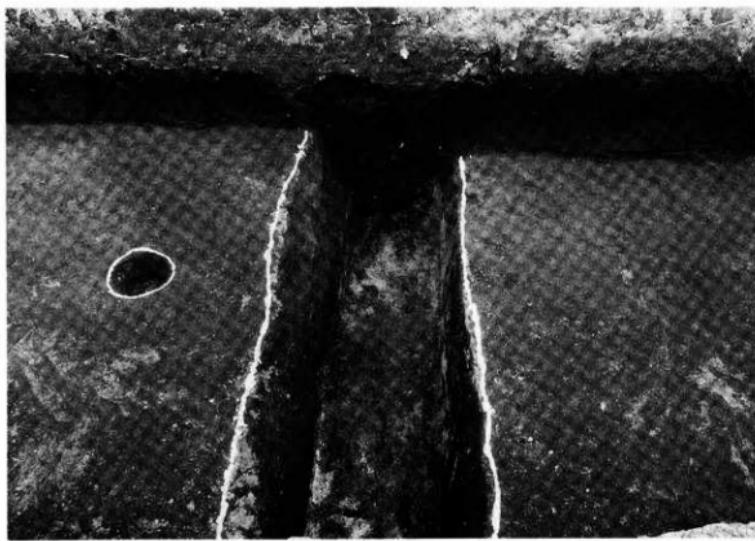
T16全景（北から）



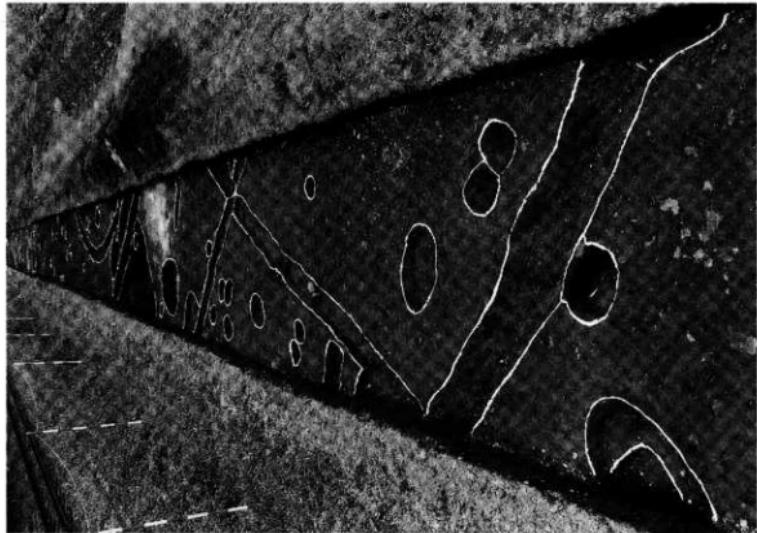
T16全景（南から）



T16下層全景（北から）



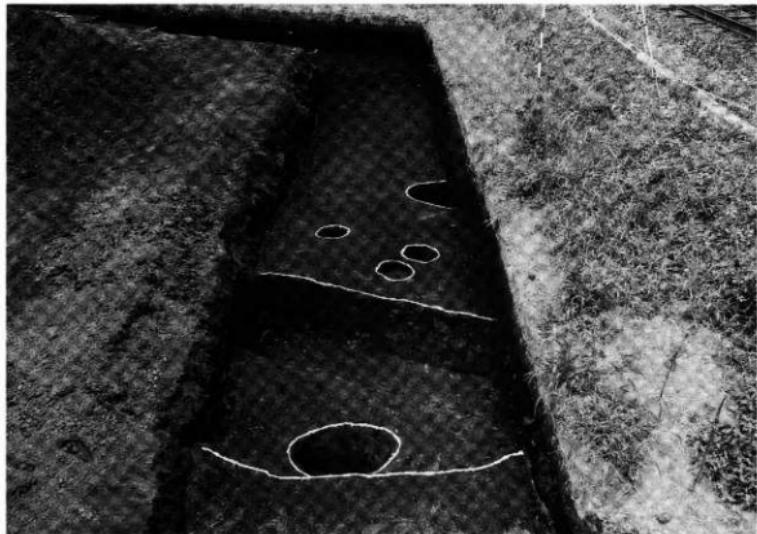
T16下層、SD 63と断面



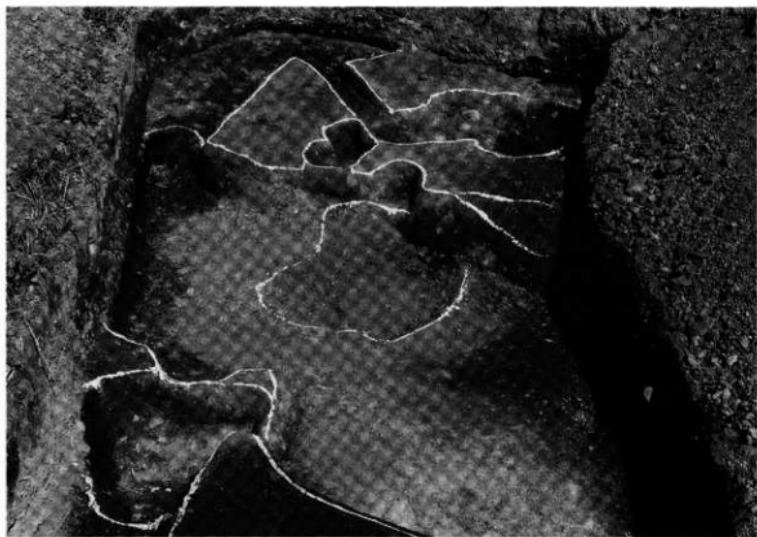
T17全景（東から）



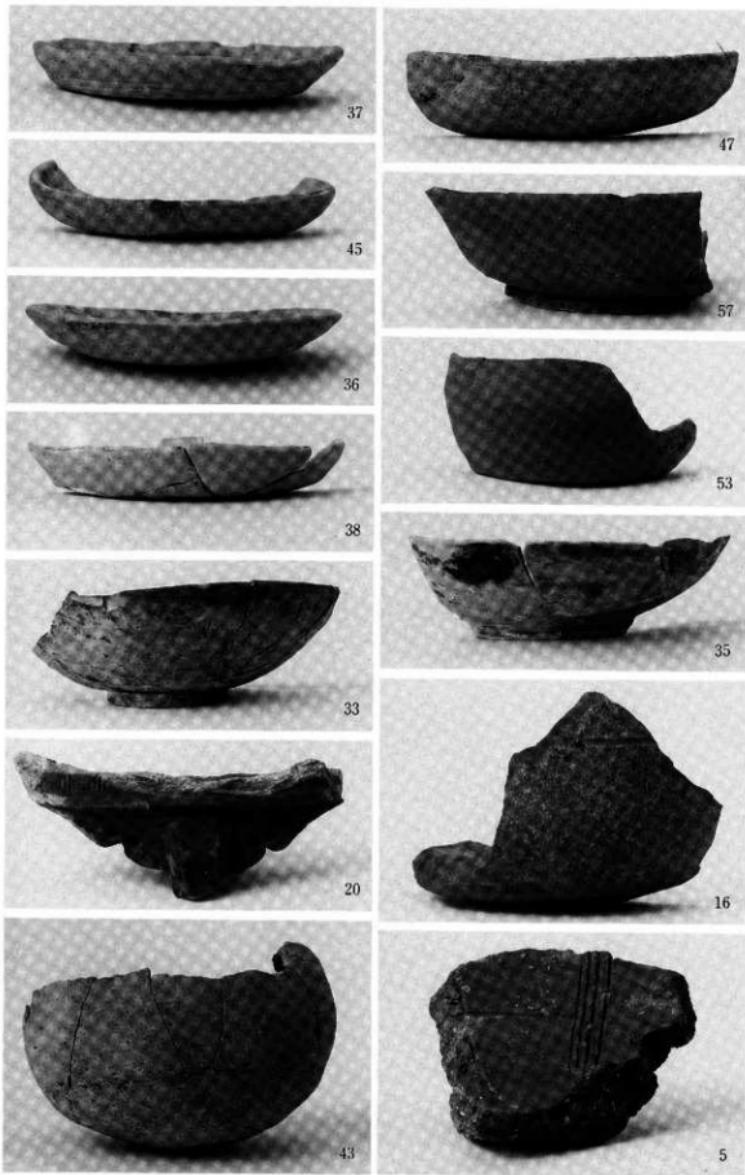
T17全景（西から）



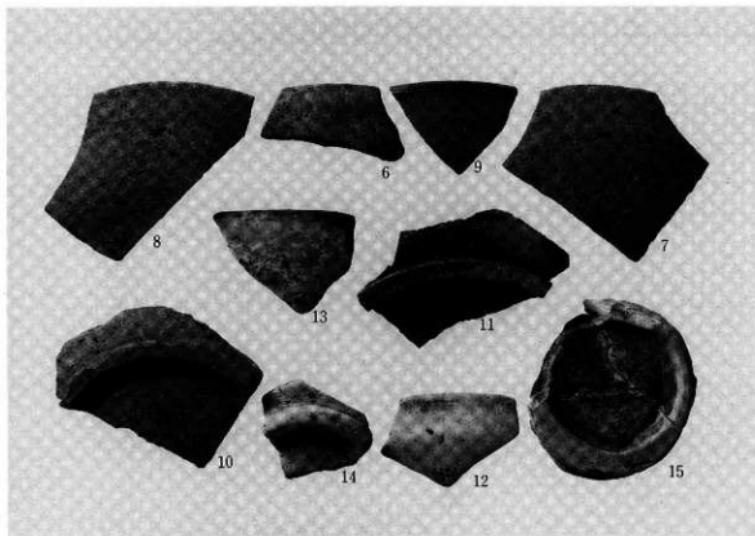
T17下層全景（北から）



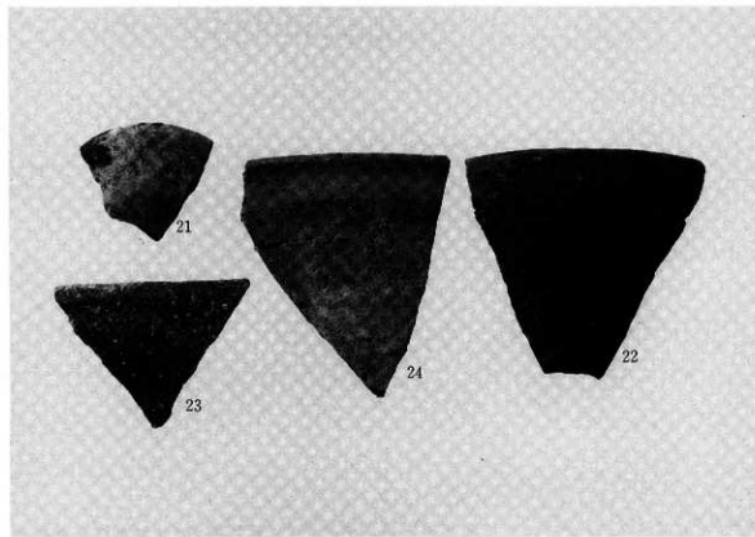
T17下層全景（南から）



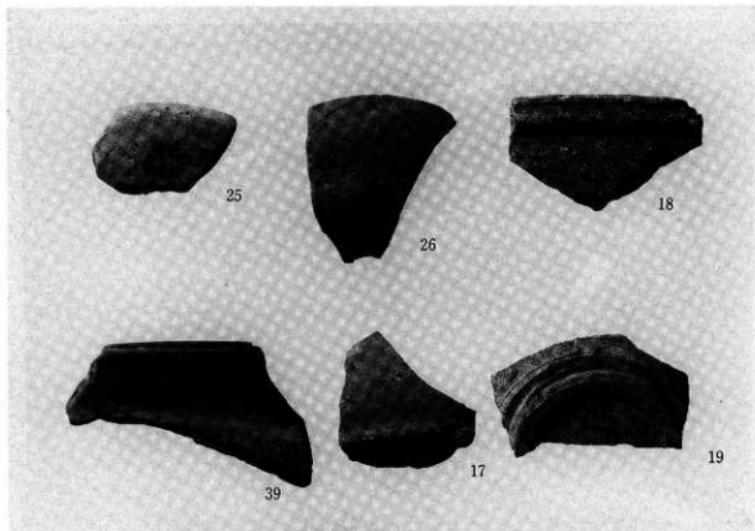
5 (SK48)、16 (SD19)、20 (SD25)、33・35 (SD61)、36～38 (SD63)
43 (T16、P10)、45・47 (T17、P16)、53・57 (T17包含層)



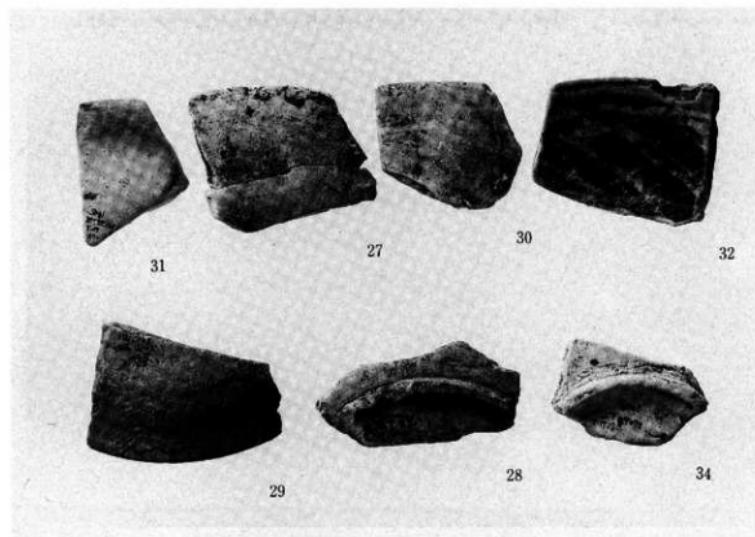
6~15 (S D17)



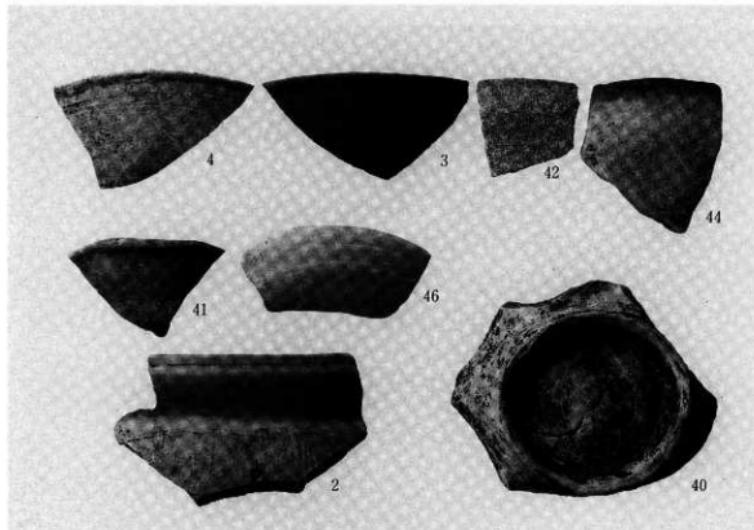
21~24 (S D29)



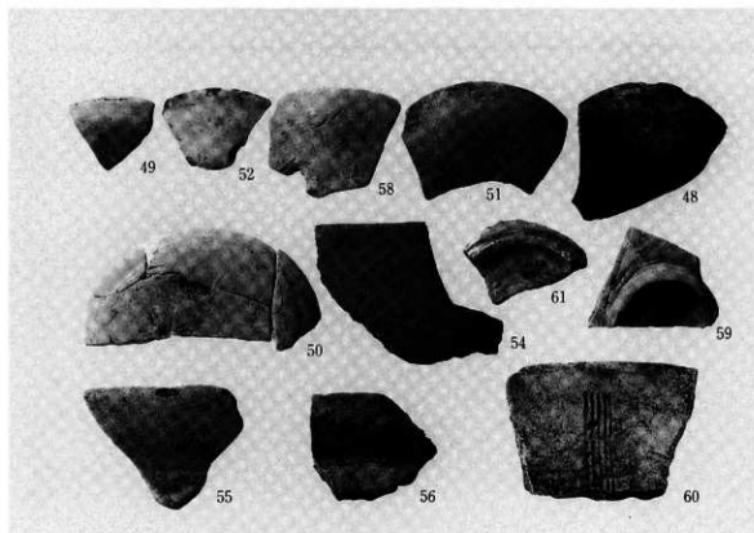
17~19 (S D23)、25 (S D30)、26 (S D52)、39 (S D65)



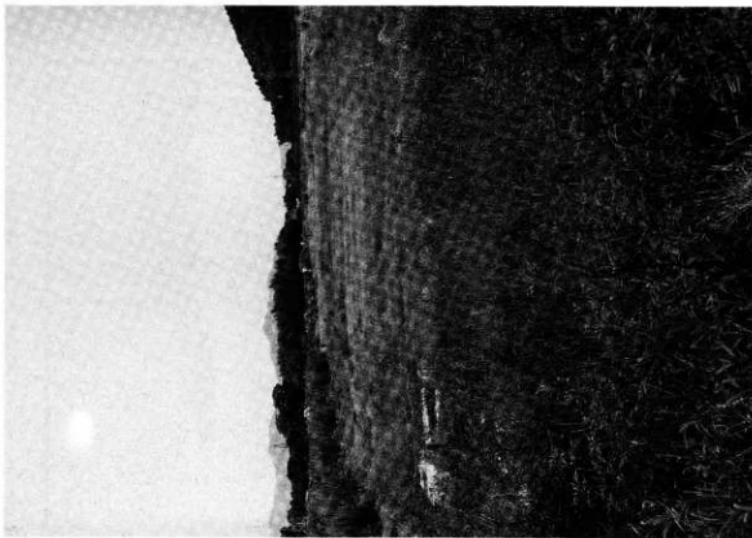
27~32・34 (S D61)



2~4 (S K29)、40 (T 2、P 2)、41・42 (T 6、P 3)、44 (T16、P11)、46 (T17、P16)



48~52、54~56、58~61 (包含層)



調査前状況（南から）



遺構検出状況（A地区・南から）



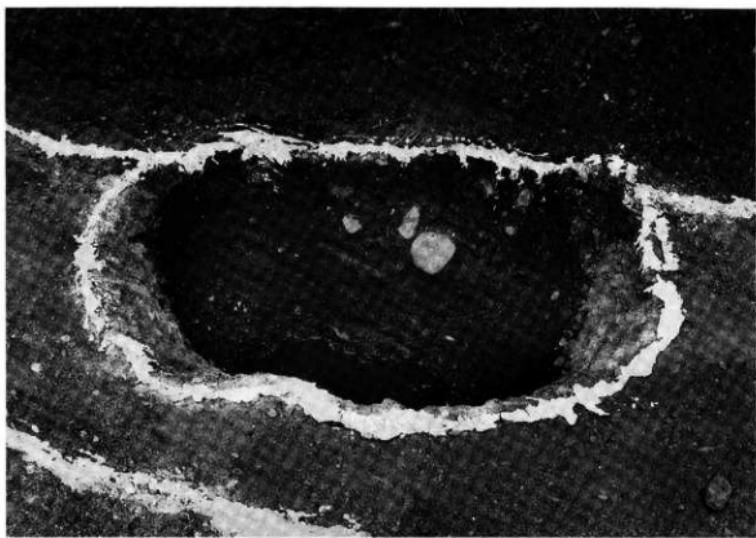
A・B地区全景（南から）



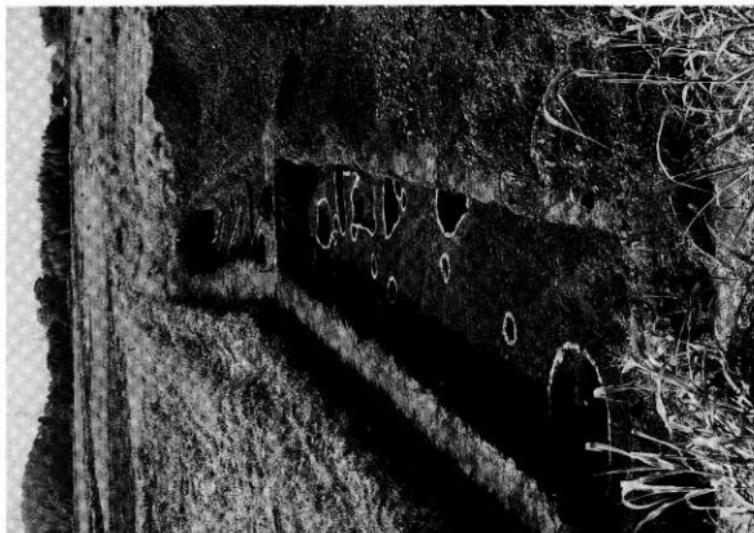
A地区全景（北から）



S A 0 1 (A地区・南西から)



S X 0 6 (A地区・西から)



C地区全景（南から）



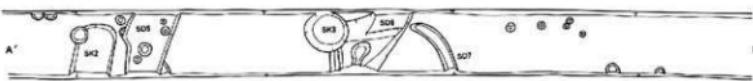
S A 0 2 (C地区・南東から)



- 1 上下遺跡 奈良
 2 常南道路 飛鳥～
 3 浅小弄城跡 室町
 4 小中道路 古市～室町
 5 慈恩寺遺跡 古墳～室町
 6 後川遺跡 古墳・室町
 7 金剛寺遺跡 飛鳥・室町
 8 西中道路 平安
 9 寺ヶ岳遺跡 平安・室町
 10 學院遺跡 修建～白鳳
 11 常楽寺城跡 中世
 12 江綱遺跡 修建～室町
 13 中屋遺跡 修建～室町
 14 上出A遺跡 修建～中世
 15 上出日遺跡 修建～中世
 16 宮前遺跡 飛鳥・室町
 17 宮ノ後遺跡 奈良・平安
 18 大手前遺跡 古墳・室町
 19 御所内遺跡 室町
 20 の場遺跡 奈良
 21 谷氏館跡 中世
 22 西海道遺跡 平安～
 23 犬ノ町遺跡 古墳～中世
 24 寒森遺跡 飛鳥・室町
 25 桃木原遺跡 奈良・室町
 26 長光寺遺跡 白鳳～室町
 27 長光寺城跡 室町
 28 町田遺跡 修建・室町
 29 桐ノ町遺跡 奈良・室町
 30 長福寺遺跡 中世



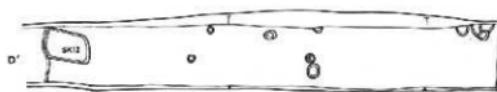
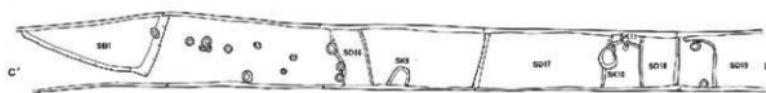
1



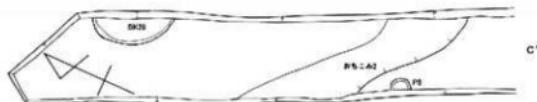
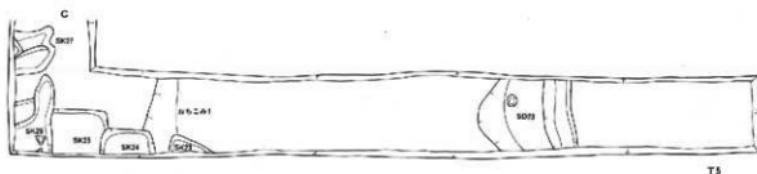
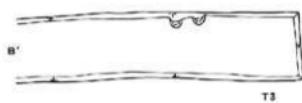
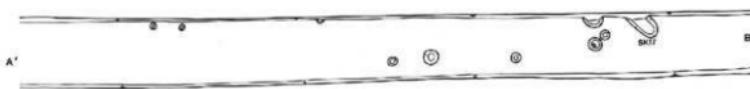
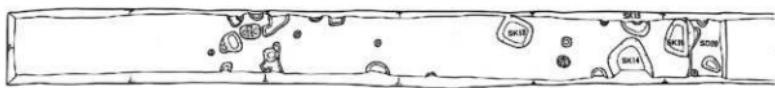
71



6



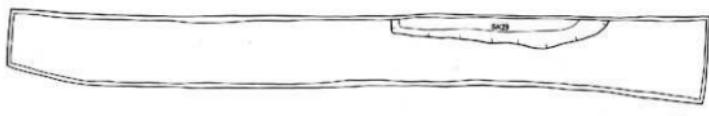
T 2



C'

6
5m

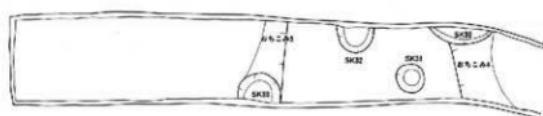
図版二十九 T759遺構実測図



T7



A

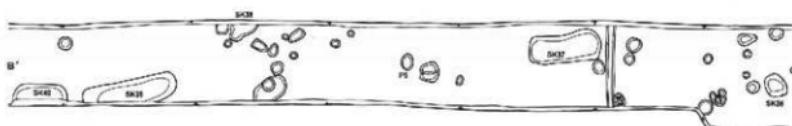


A'

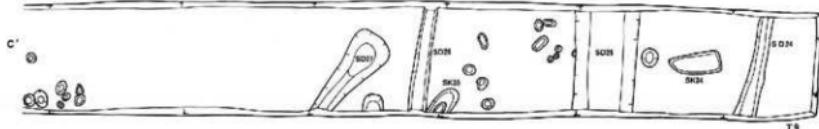
T8



B

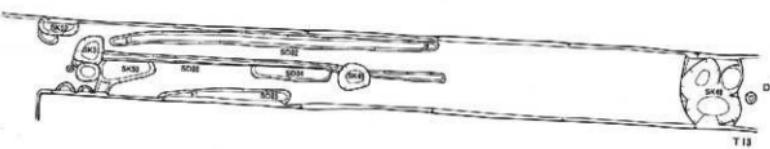
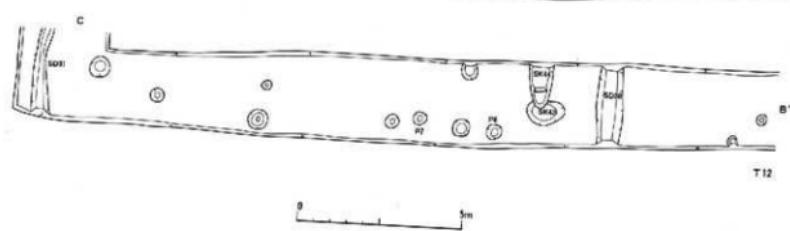
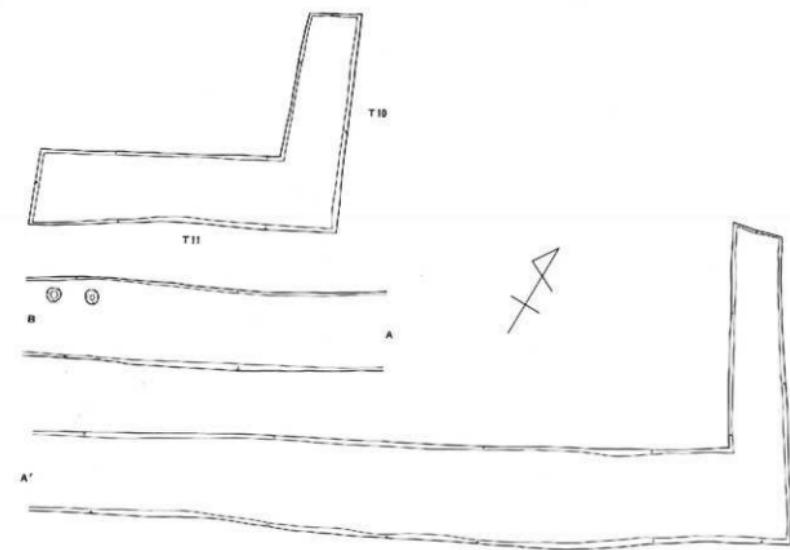


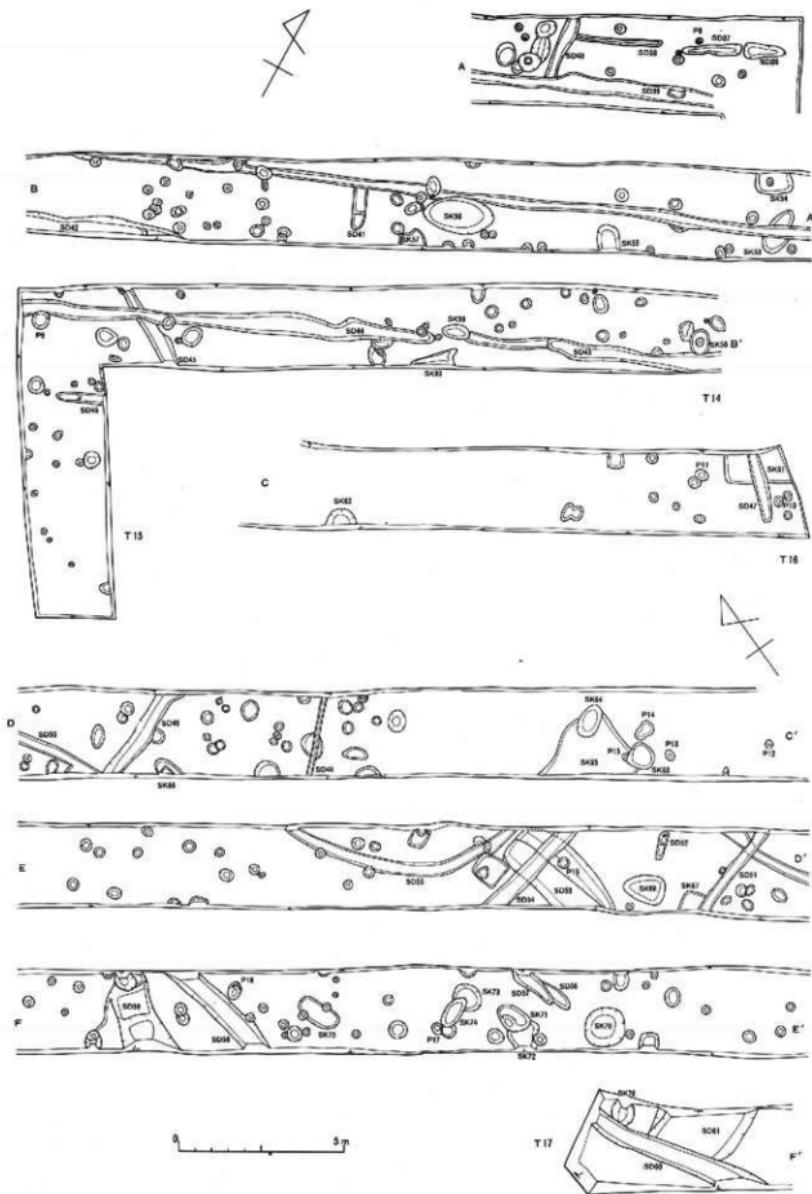
C



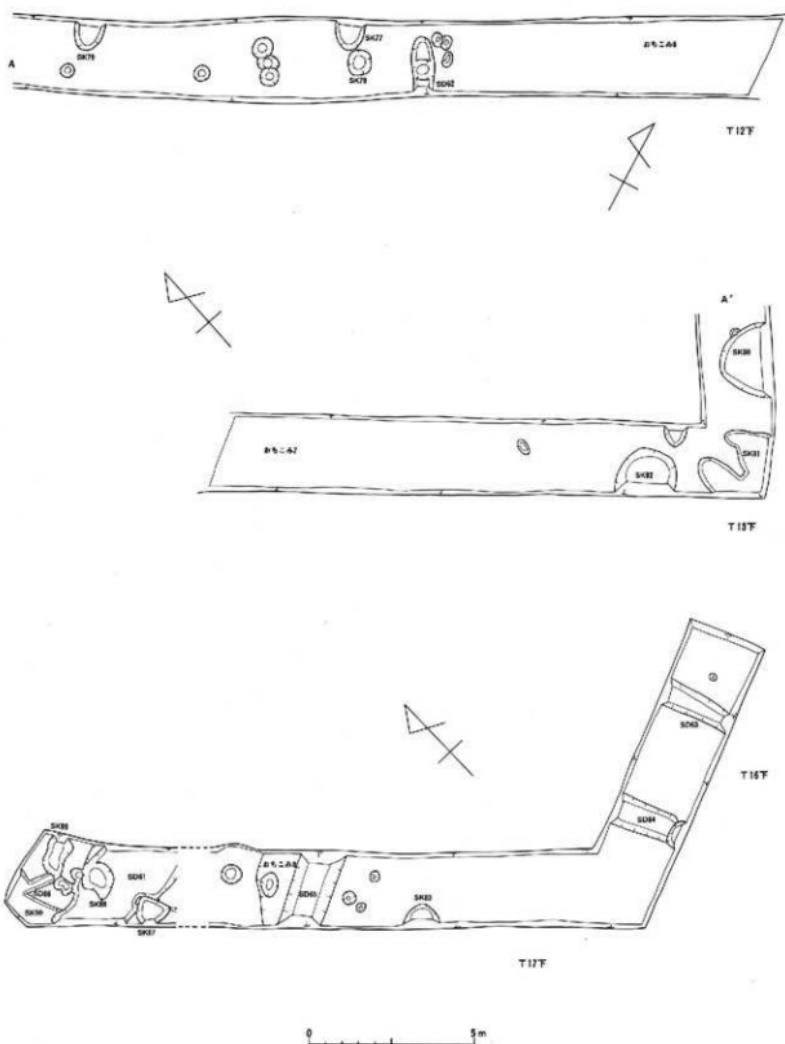
C'

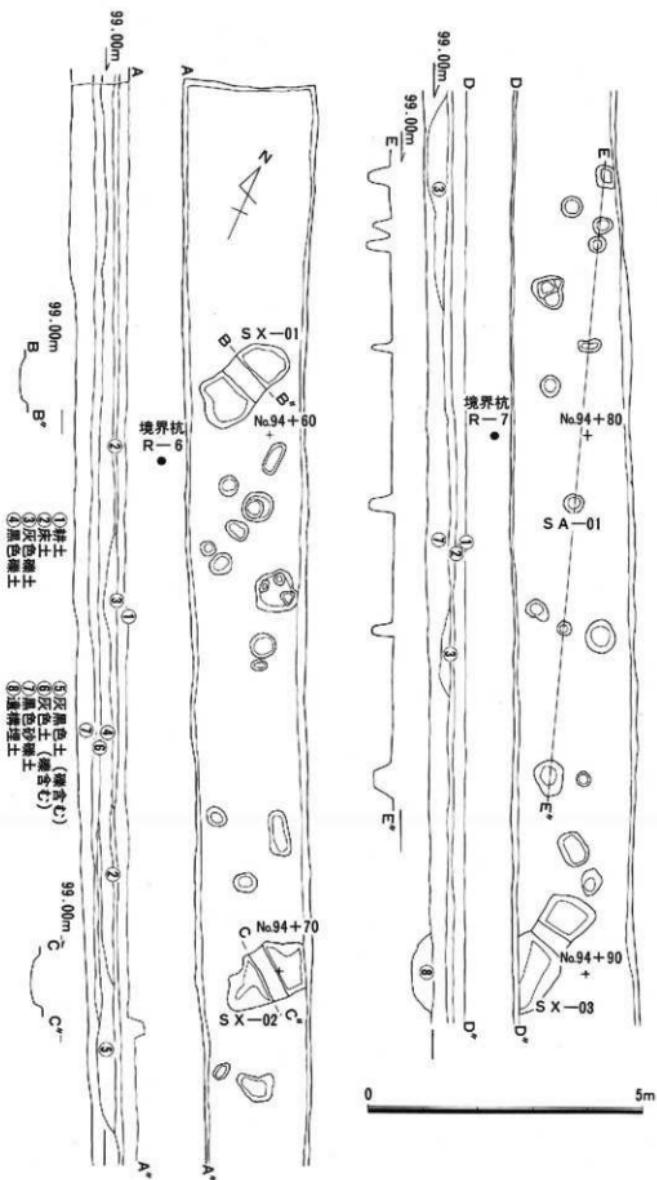
圖版三十 T 10 13 造構案測圖



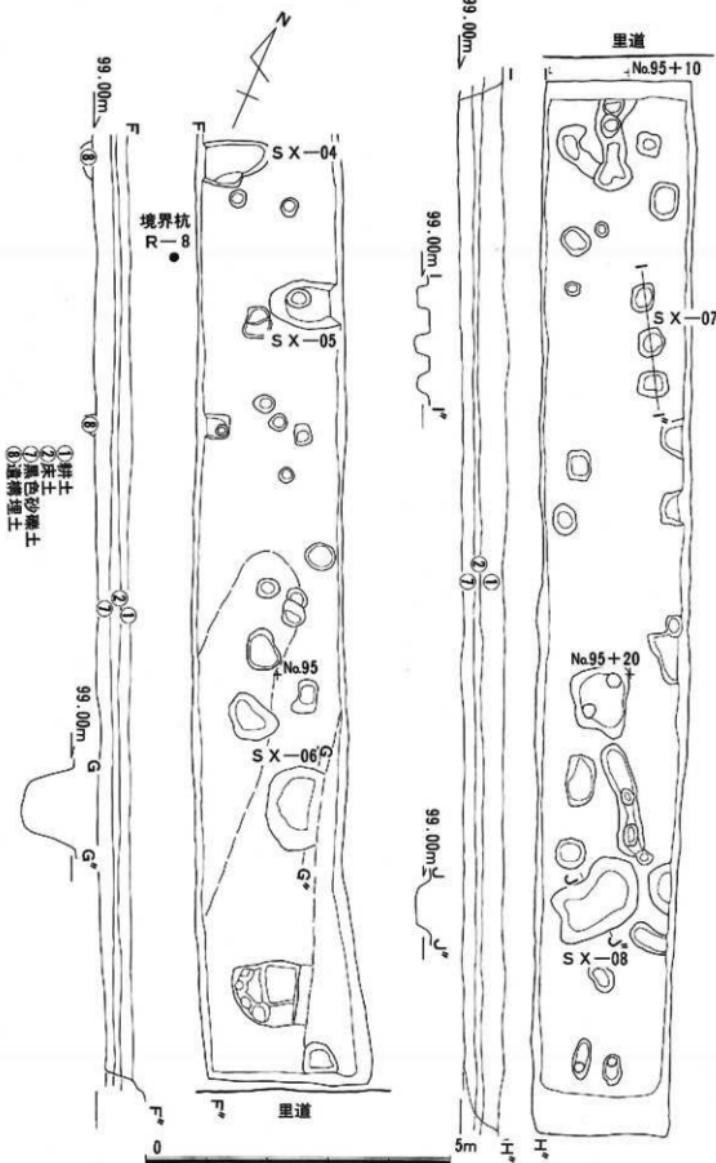


圖版三十二 T12~17 下層造構実測図

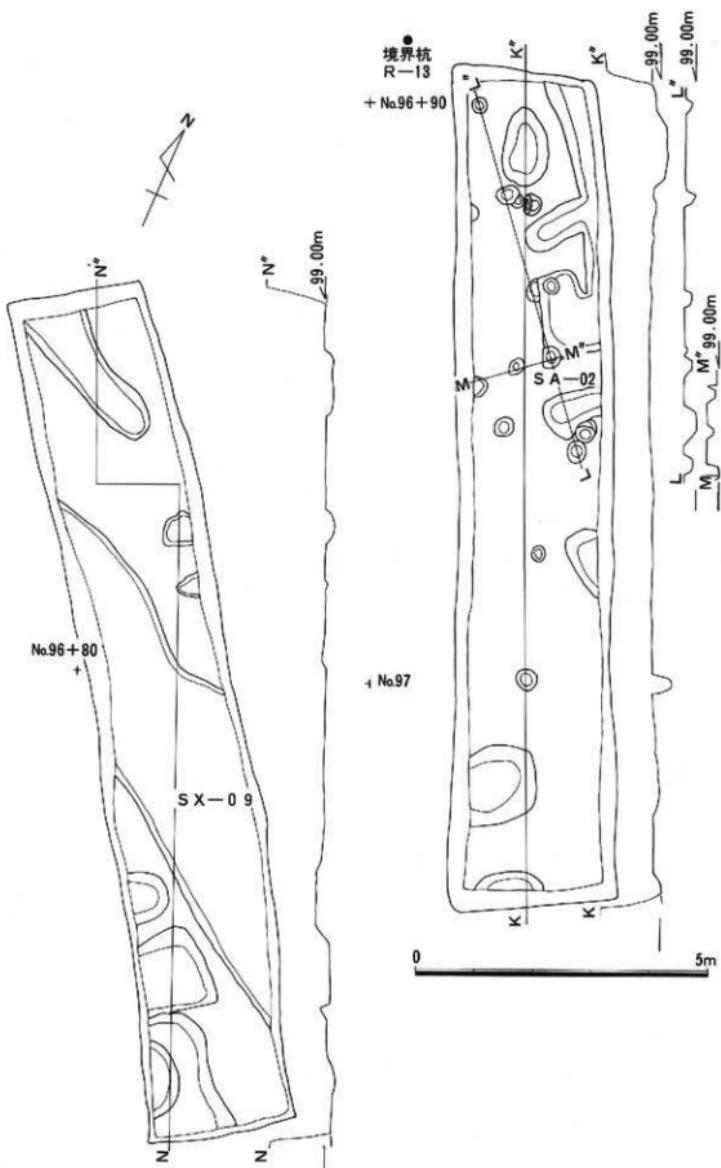




造構実測図（A地区）S=1/80



造構実測図 (A・B 地区) S=1/80



遺構実測図（C地区）S = 1/80

平成2年3月

「ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書 XVII-8」

上・下遺跡・常衛遺跡

編集・発行 滋賀県教育委員会文化部文化財保護課

大津市京町四丁目1-1

電話 0775-24-1121 内線 2536

(財) 滋賀県文化財保護協会

大津市瀬田南大萱町1732-2

電話 0775-48-9781

印刷・製本 宮川印刷株式会社